

私がよければすべてよし！

しょうゆらーめん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私にかかればどんな事件も、あっという間に推理してみせよう！

さあ、この私に見合う事件はどこかな？

文豪ストレイドッグス要素ほぼなし（主人公がそれっぽいだけ）

目次

一年生編

はじまり

1

Murder in the riv

er 前編

8

Murder in the riv

er 後編

19

遠山キンジの災難

30

遠山金一の驚愕 前編

39

遠山金一の驚愕 後編

47

ワインレットの陰謀

58

スカーレットの真実

73

シグナルレットの策略

81

閑話 コーリング・クエスト

96

エビで鯛を釣る 上

102

エビで鯛を釣る 中

111

エビで鯛を釣る 下

125

閑話 昼に夢見る人

138

蒼穹の前奏曲

145

黄昏の独唱曲

153

一年生編

はじまり

世間一般の中学3年生といえ、中高一貫校でもない限りは、受験生である。

それはこの私、江戸川 キリであつても例外ではない。

まあ、他の人のように勉強漬けにはなっていないが。

「高校はもう決めてあるのか？」

父親、江戸川 誠の問いに、私は夕食の手を止めた。

大正浪漫の面影が色濃く残る室内に響いていた食事の音はぴたりと止む。

私たちは、テーブルを挟んで目を合わせた。

こんな時代に古めかしくも着物を身にまとつた父さんは、心配そうな目つきをしていた。

だから私は、精一杯の笑顔で答える。

「全つ然決まってるないねー！いやー私つて天才だから、選択肢がいっぱいあつて迷っちゃう！」

冗談？いやいや、私は本当に天才なのだ。

学校のテストなんかはあんまり本気を出さないから、目立たないだけで。

それを父さんはちゃんと理解しているから、あまり私に口出したりはしない。

「…武偵になるのはどうだ？」

武装探偵略して武偵。その名の通り、武力を行使する探偵。

頭を使う探偵は、私に向いているのかもしれない。

「…選択肢にはいれておくよ」

食事を再開する。

武偵、か。

東京武偵高のパンフレットを一瞥する。

うーん、悪くないかな。

適当な高校に進んだって、その先、職業選択がまだ待ち受けている。

どうせしたいこともなりたい職業もないし、そんなのは面倒臭いじゃないか。

なら、初めからなれる職業があらかじめ決まっている武偵高は、将来的に楽かな。

強襲科ではなく探偵科なら、命の危険も少ないだろう。

決めた。

「よし、東京武偵高を受けよう」

とうとうやって来た受験の日。

武偵高には父さんが、時代錯誤なクラシックカーで送ってくれた。

電車とかバスで来るっていう手段もあるが、何を隠そう私はどちらの乗り方も知らないのだ！

聞くは一時の恥、知らぬは一生の恥というが、聞いても分からないなら仕方ないよね。文明が進化するのはいいが、それにともない複雑化するのはどうかと思うよ。

そんなことを言ったら、バスや電車の利用法は簡単だよ、と友人に指摘されてしまったが。

この話はもういいだろう。

というか、校内に入ったはいいが、建物が多すぎて受験会場が分からない！

案内図を見たが、さっぱりだね。

今自分がどこにいるのかもわからないんだから。

地図もろくに読めない私は、人に聞くしか手段はないようだ。

「ねえ、君。探偵科の受験会場どこか知らない？」

受験生っぽい男の子に、背後から声をかける。

背中をトントンと叩くと、振り向いてくれた。

なんか根暗そうな人だなあ。

怖そうよりはマシだけど。

「それなら、すぐそのあの建物だ。わかるか？」

「おお、あそこか！灯台下暗しとはこのことだな！恩に着るよ。じゃあ、強襲科の試験、頑張つて」

あはは、不思議そうな顔をしているなあ。何で強襲科を受けることを知ってるんだ、つて顔だ。面白い。

教えてあげてもいいが、今じゃない。今後会うことがあれば、その時に教えてやろう。手を振つて、ようやく受験会場となる建物に向かう。

会場には既に多くの人がいた。

探偵科は筆記試験。皆緊張した面持ちで席に着いている。

受験番号によって決められている席を探し当てて座る。

メガネケースから、黒縁のメガネを取り出してかけた。

視線だけで周りを見回すと、一人の女の子が目についた。

うわ、あの人派手だなあ。ツーサイドアップの蜂蜜色の髪に、フリルを大胆にあしらった服——あれはもしかして中学の制服、であってるのか？

ああいう服装は、可愛い子にしか似合わない。

似合うような人は少ないのだろうか：彼女は少数派、似合う人のようだ。顔立ちからして、純粹な日本人ではなさそう。

そんなことを考えているうちに、試験が始まる。

武偵高の探偵科。

どんな問題が出るのだろうか、と期待していたのだが：

うーん、簡単すぎて退屈だなあ。

解答用紙を全て埋め、それでも退屈だったから色々と解答を追加していく。

まあ、この程度か。

ちよつと期待しすぎたみたいだ。

職員会議にて。

探偵科の教員の一人である高天原ゆかりは、文字によつて黒く埋め尽くされた答案を見て戦慄した。

「間違いなく、彼女は天才だな」

尋問科の綴は、そう言つてタバコをふかす。

その言葉に異議を唱える者は、誰もいない。

脅威にもなりうる才能を持つ生徒が、一般中学校にいたとは。

目前にしても未だに信じられず、高天原はその偉業を口に出した。

「犯人とその証拠、動機……だけじゃなく、どうすれば犯人が自供するか、犯人の育った環境や人柄まで言い当てている……？」

探偵科の入試は、筆記試験である。

その問題の中に、事件の概要がまとめられた紙から犯人を推理し、犯人とその証拠を書く問題がある。

他の生徒は、正解不正解はともあれ、要求されたことだけを解答していた。

しかし彼女だけは違った。

こんな問題はお遊びだとしても言うかのように、事件の背景までもを鮮明に解答していた。

もちろん結果は、すべて正解。

書き足されている情報も含めて、答案に書かれたことは寸分の狂いもない真実。文句なしの満点だった。

「これが、まだ中学生の子供だというの……？」

信じられないとばかりに、高天原は再度答案を読み直す。

プロでもここまで鮮明に解答できるものは、ほんの一握りいるかないかだろう。

「Sランクでも申し分ない、どころかRランクでも通じそうな実力：しかし、すこし様子見が必要だろう」

江戸川キリーリーー現時点でのランクは、A。

Murder in the river 前編

「そろそろ行った方がいいよね」

私以外に誰もいない寮の一室。

合格し、はれて武偵高に通うことになった私は、先日から寮生活を始めていた。

まだ完全に荷解きは出来ていないので、部屋の隅にはダンボールが積まれている。

入学式は数日前に済ませたばかりだ。

真新しい臙脂色のセーラー服に身を包み、入学祝いにと父さんがくれた拳銃――コルト・キングコブラを帯銃する。

1980年代に生産が開始された、割合新しいリボルバーだ。サビに強いステンレスが使われている。

他にも色々父さんが言っていた気がするが、興味なかったので聞き流した。

まあ、あまり使うことはないだろう。

これまた入学祝い（今度は母から）の折りたたみナイフであるスミス&ウエツソンCK5TBSも、忘れずにポケットに仕舞い込んだ。

これも父さんに説明されたが、聞いていなかったなあ。

武偵高では、面倒なことに拳銃、刀剣の携帯が義務付けられている。

まだ使ったことなど全くないので、真新しいままだ。

おっと、そういえば四月は名札を付けるというルールがあるんだった。

『江戸川キリ』と書かれた黒い名札をつける。

玄関先の帽子掛けからチョコレート色のハンチング・キャスケットを取って被り、最後に同色の腰ほどまでの丈のコートを、袖に腕を通さずに羽織る。

黒縁のメガネも持ったし、これでよし。準備完了。

「行ってきます」

返ってこない挨拶をして、私は学校に向かった。

私の通学は主にバスである。

乗り方などは未だに曖昧なので、バス停で新しくできた友人と合流しなければならぬ。

「おはよう、星伽！」

私に気づいていなかったようなので、後ろから大声で挨拶してやった。

案の定、星伽はびくつと肩を跳ねさせて、目をまん丸にして振り向いた。

「び、びっくりしたあ……おはよう、江戸川さん」

それを見た私は、満足げに口角を上げる。

純日本人、大和撫子を体現したような前髪ばつつの黒髪美人さんは、星伽白雪。詳しくは知らないが、星伽神社の巫女さんらしい。

「おい、あまり白雪をいじめるなよ」

そう言ったのは遠山キンジ。

受験の日に会場を教えてくれた、ネクラそうな男子生徒だ。

星伽とは幼馴染というやつらしい。

「いいじゃないか、いじめてる訳じゃないし。それに星伽はそんなに嫌がつてないよ？」

「だとしても、だ。心臓に悪いだろ」

「ぎ、キンちゃんが私の心配を…？」

当の星伽は片思い相手である遠山の方を見て、顔を赤らめている。

こんなにわかりやすいのに気付かない遠山は、どれだけ鈍感なのか。

「おはようー！」

声をかけてきたのは、武藤剛気。

星伽白雪に好意を寄せている。

そしてそのことに、星伽も遠山も気付いていない。

お、ようやくバスが来た。

私たちは4人でそれに乗りに込んだ。

「そういえば、キリ、お前今日はメガネじゃないのか？」

ふと、思い出したように遠山が指摘する。

ああ、そういえば最近メガネをかけたまま学校に行ってたんだった。

まあ、説明するいい機会だろう。

「基本的にメガネはかけてないよ。脳にかかる負担をセーブするためにね」

わざと、理解できないだろうことをはじめに言う。

三人とも頭にクエスチョンマークを飛ばして、見ているだけで面白い。

「?…?どういふことだ?」

遠山は手っ取り早く私に尋ねてくる。

まあ、わからないだろうね。

「トリガー、だよ。私は天才すぎて、色々と物事を考えすぎてしまうから、日常生活だけでもある程度脳に負担がかかるんだ。だからメガネをトリガーにして、オンとオフを分けている」

「じゃああのメガネは、特別製なのか?普通のメガネにしか見えなかったが」

「いや?普通の度なしメガネだよ。暗示をかけてるんだ。――要するに、メガネをかけているときは『推理モード』ってことだよ」

武藤と星伽は納得したように、へー、とか言っているが、遠山は何か引つかかるとこ

ろがあるらしい。

粗方予想はついているので、先に答えを教えてやろうじゃないか。

「遠山と受験の日に会ったとき、メガネなしでも強襲科だつてわかったのは、なぜか？：そう聞きたいんだろう、遠山。いいだろう！教えてやる。遠山からは他の武偵高付属中学校の人よりも、硝煙の匂いが濃かった。：それに、服の上から見ただけでも、鍛えられているのはわかるからね。そのくらい、メガネなしでもちよつと考えればわかることだ」

遠山は少しの間啞然としてから、でも、と反論の言葉を発した。

「車輛科や装備科、他の学科でも、結構筋肉のあるやつはいるぞ？：なのに、」

「他の学科と強襲科じゃあ、筋肉のつき方がまっつったく違う！：そもそも筋肉をつける目的が違うだろう？強襲科は直接戦闘のため、他の学科は力仕事のためが多い。戦闘のためもあるかもしれないが、戦闘が専門の強襲科と他の学科の生徒じゃ、筋肉量が違う」

「：よくそんなのわかるな」

「服を見ればわかる。ま、武偵はあからさまに筋肉つけるとバレるから、他の人よりも筋肉量がわかりにくいんだけどね」

実際、遠山も少し観察する時間を置いてから気付いた訳だし。

私の観察眼を甘く見ない方がいいよ？

そうこうしているうちに、バスが停車する。

どうやら到着したようだ。

5時間目以降の専門科目、探偵科の授業は、私にとつては結構当たり外れが大きい。古式ゆかしい推理学なんて、私には毛ほども役に立たないね！

その他の探偵術なんかは、地道な調査が大のニガテな私には、受ける価値のある授業……といえるだろう。

しかし、今日の私は授業には出ない！

依頼掲示板にあつた依頼を解決に行くのだ。

ちようど良さそうな殺人事件があつたからね。

ところで、さつきから背後にいる……

「峰、君も依頼かい？」

背後を振り返り、ものかげの方にそう話しかける。

「うぐっ……うー、きりりんすぐに気付いちやうから面白くなーい……」

ものかげから唇を尖らせながら出てきたのは、峰 理子。

同じ探偵科のAランクで、私が受験の時に派手だな、と思つた蜂蜜色の髪の少女であ

る。

入学初日から、すでにその制服はフリルたっぷり改造されていた。

白ロリ風アレンジとかなんとか言っていたな。

「私を騙そうなんて百万年早いね！大方、私と一緒に依頼に行こうとしているんだろう？」

「だーいせーいかーいー…助手つてことで、ついていつてもいい？」

「私に助手？まさか、二流探偵じゃあるまいし、助手なんていらぬよ。…邪魔しないなら、ついてきてもいいけどね」

助手は本気でいらぬが、私も鬼じゃない。

ついてくるくらいのは許そうじゃないか。

前を向いて、また歩き出す。

「やったー!!ねーねー、現場はどこ？」

ちよつと小走りで峰は私に並び、顔を覗き込んでくる。

バナラみたいな甘い匂いがふわりと香った。

女子つて感じがすごくなる。

「私もよくわかんないんだよねー。つてことで峰、案内よろしく」

依頼の紙を峰に渡し、私は駅の方に歩いて行く。

電車で行く、つてことはわかるんだけど、電車の乗り方も、どの駅で降りればいいのかもさっぱりわからない。

だから、あらかじめついてくるだろうと推理していた峰に頼ろうと思つて学校を出た。

「え!?ちよ、まさかのりこりん任せ?!」

ついてくると言つたんだから、そのくらいは働いてくれるよね?

現場となる河原に到着した。

「うう…まさかきりりんが切符の買い方とか改札の通り方まで本当にわかんないとは…」

「案内ご苦労!」

ぐつたりする峰に声をかけ、現場入りする。

さあ、私を満足させてくれる事件であることを祈るよ。

他の武偵も先に調査に当たっているようだ。

そばにいた鑑識科の子に、状況や事件の概要を聞く。

「殺されたのは刑事の女性です。遺体は川を流れていたところを発見されました。死亡

推定時刻、殺害現場共に不明です」

「となると、死因は溺死？」

峰が口を挟む。

鑑識科の子が答える前に、私はビニールシートを被せられた遺体に近づき、そつとめくった。

「どうやら、溺死ではないようだよ、峰。胸部に三発分撃たれたあとがある。一発は心臓を直撃だ」

「うへー、何で三発も？」

「まだ何とも言えないね、あ、続きある？」

鑑識科の生徒の話、まだ途中だったかな？

と思ったが、もう話は無さそうだ。

「ちなみに銃弾は見つかってる？」

「いえ、まだです。職場の後輩の方の話だと、特定の交際相手もないようで」

「その後輩は？」

「あちらにいらつしやいます」

ああ、あれか。青白い顔をした男性が、他の武偵と話をしている。

意外と近くにいたな。

服装からして巡査つてところか。

「確かある犯罪組織の報復手口に、似たようなのがあったよね？あ、でもあれはもつとエグかったっけ？」

峰は唇に指をあてて一応考えているようだ。

しかし真実には辿り着きそうにない。

「それに偽装しようとしたのかもかもしれない」

「え？でも、それにしても雑じゃない？」

多少は頭が回るようだ。だが、真実には程遠い。

「これは難事件だねー…きりりんはどう思う？」

その言葉に、口角が上がった。

さあ、私の推理を披露しようじゃないか。

私はメガネを取り出して、かけた。

「なるほど」

「き、きりりん？もしかして、犯人がわかつちやったの!？」

峰がそこそこ大声で話したせいで、周りの武偵たちがざわつき始めた。

「まさか。まだ全然進展のない事件ですよ？それに…あなたは、調査なんてちつともしないじゃないですか」

先ほどの鑑識科の生徒は、馬鹿馬鹿しいとでもいうかのような目をこちらに向ける。

「いいかい？名探偵は調査なんてしないの。証拠に、もう犯人が誰でいつどうやって殺したか、どこに証拠があつてどう押せば犯人が自白するのもわかっている」

「ほ、本当にこの短時間でわかっちゃったの!？」

峰は目を丸くして驚いている。

「当たり前だ。この世の難事件は、すべからず名探偵の仕切りに決まっているだろう？」

「そこまでのいうのなら、その推理、見せてもらおうじゃないですか」

信用ないなあ。こちらを見る武偵の目、すべて疑っているような目だ。

この名探偵の推理を聞けば、そんな目なんてできなくなるだろうけどね。

「いいだろう。犯人は——君だ」

そうやって私は、1人の殺人犯を指差した。

Murder in the river 後編

「犯人は、君だ————巡査」

私が指差したのは、被害者の後輩だという巡査だった。

「は……？」

巡査はぼかんとして私の指と顔を交互に見る。

私は、不謹慎にもにやりと笑ってしまった。

「巡査が、彼女を殺した」

「な、馬鹿なこと言わないでください！大体、現場に都合よく犯人がいるわけ——」

鑑識科の生徒は、無謀にも私に反論してくる。

しかし、すぐに私を認めざるを得なくなるだろう。

「犯人だからこそ現場にいたがる。それに、言ったよね……証拠がどこにあるかもわかるって」

鑑識科の生徒は口をつぐみ、私の次の行動を観察する。

私は、巡査に近づいて手を差し出した。

「銃出して」

「!!」

「一般人に貸すのならともかく…私は武偵だ。何も問題ないだろう?」

ほら、と催促しても、巡査は動かない。

何かを言おうとして口を開いては閉じる、という行為を無意味に繰り返している。

そうだよ、証拠をみすみす武偵に渡すほど馬鹿ではないよね。

私が渡しやすいようにしてやろうじゃないか。

「いくら武器がぼんぼん出回る世の中とはいえ、短時間で素人が銃弾を補充するのは、容易じゃない。それが支給された銃であれば尚更だ。…今、考えているんだろう?」

「減った三発分の銃弾について、どう言い訳するか」

「っ!」

「…巡査、銃を見せてください」

周りにいた武偵も、さすがに怪しいと思ひ始めたのだろう。

巡査に疑いの目が向いている。

たかさんの目にさらされ、ようやく巡査は銃に手を伸ばした。

「…そうだ、それでいい」

武偵は銃を受け取ろうと、彼に半歩近づく。

が、巡査は銃を取り出すと同時に撃鉄を起こしていた。

追い詰められた人間の行動なんて、限られてくるよね。

「峰、行け！」

予想していた私は、峰の背中を思い切り押した。

峰はその勢いのまま、巡査の方に飛び出す。

「ええ!？」

驚いたような声を出しているが、問題ないだろう。

思った通り、峰はまず銃口をそらし、あつという間に巡査を取り押さえてしまった。

「は、離せ!! 僕は関係ない！」

「逃げてても無駄だ。犯行時刻は昨日の早朝、場所はここから150M上流の、造船所跡地」

巡査は目を見開く。

私にはすべてお見通しなのだから、逃げたところで意味などない。

それを思い知った方がいい。

「そこに行けば、あるはずだ。君と被害者の足跡。それから、消しきれなかった血痕も……」

まだ暴れようとする巡査を峰は一人で押さえつける。

探偵科のになかなかやるなあ。

「どうして……」

「私に解決できない事件など無いよ」

だって私は、名探偵だからね。

武偵高での取り調べに、私と峰も同席することとなった。

巡査はパイ椅子に腰掛けて、項垂れている。

そしてそのまま、静かに話し始めた。

私には既にわかっている、事件の真相を。

「撃つつもりは、無かったです。——彼女は、ある政治家の汚職事件を捜査していました。そして、大物議員が犯罪組織に関わっているという証拠を、予想外にも手にしてしまっただんです」

私も峰も、取り調べをする武偵も、黙って巡査の話を聞く。

まるで懺悔のようだ。

「しかし議員も老獪で、警察内のスパイを使って証拠を消そうとしました」

「そのスパイが、君というわけだね」

巡査は黙って頷く。

人は見かけによらないものだね。一見すると、ただの優男なのに。

「昔、警察官の試験に三度落ちて、落ち込んでいたんです。そんな時に声をかけられました。『どうしても警察官になりたいか』って……昔から警察官に憧れていた僕は、議員の力でその夢を実現させました。その見返りに、議員の指示に従っていたんです」

「そして、議員の犬として被害者を殺したのか？」

取り調べを担当する武偵が彼にそう聞いた。

随分と早計で、愚かな発言だ。

私は、巡査が答える前に口を挟む。

「違うよ。ねえ、巡査」

「はい。…僕は、彼女に警告を…」

私に否定された武偵は少し不満げだが、そんなことは関係のないことだ。

私は悪くないしね。

「このままでは消されるから、証拠を手放せと。しかし、彼女は……決して手放さない、後は証拠を馴染みの検察に渡すだけだと言って……だから、僕は……」

「銃で、被害者を脅したの……？」

峰はいつになく真剣な表情で、巡査に向き合っている。

いつもはふざけているような態度の彼女だが、さすがにこの状況では真面目だ。

「…僕に彼女は撃てなかった。彼女もそれをわかつていたから……僕は、自分に銃を向けて彼女を脅そうとしました。彼女は僕を止めようとして揉み合いになり、そのはずみで発砲を…」

ひどく辛そうな表情で、巡査は話す。

彼にとつても彼女を撃つのは本意ではなかった。

私は彼の後を継いで話す。

「このままでは殺人犯、警察もクビになる。混乱した君の頼れる人物は、ひとりしかいなかった…電話した君に、議員は証拠隠滅の方法を教え、君はその通りに彼女の胸にもう二発撃ち、他の犯罪組織の仕業に偽装………発見を遅らせるため、川に遺体を流した」
巡査は黙っている。沈黙は肯定と見なしていいんだよね？

「被害者が入手した証拠はどこだ？」

武偵は、怖い顔をして巡査に聞く。怒鳴るような勢いのそれだったが、しかし巡査は黙ったままで。

仕方がない。少し背中を押してやろう。

「彼女の最後の言葉、当ててみせようか」

私は、巡査にそう話しかけた。

巡査は、不思議そうにこちらを見上げる。

「ム（めんなさい）……だね？」

「そこまで、わかっちゃうんですね…」

「調査は、わずかに声を震わせてもう一度うつむいた。

「証拠品は、僕の机の引き出しにあります…」

日が随分と傾き、街は茜色に染まっている。

私と峰は、二人並んで歩いてた。

取り調べを終え、寮に帰るところである。

「もう、酷いよー！ー！りこりんを犯人の方に押し出すなんて、ぶんぶんがおー、だぞー！」

やっぱりそれを怒ってくるか。

予想はついてたが、思ったより軽い感じだった。

こういうところが人に好かれるのかもしれないな。

「もちろん君が戦えることくらい、わかっけていて背中を押したよ。君には言つてなかったか…：私は、大体見ただけで人の筋肉量から、何ができるかくらいわかる。…私の観察眼を甘く見ない方がいいよ」

「それにしたって、いきなり押すなんて酷いじゃん！」

峰は、頬を膨らませて私の前に立ちほだかった。

私は足を止めて、笑顔を見せた。

「それについては反論できないね」

謝るつもりもさらさら無いが。

むー、としばらく膨れていたが、やがてため息をつくとき、峰は元通り並んで歩き始めた。

「まあいいや。すごい推理も見れたし……：そういうえばきりりん、彼女の最後の言葉まで当ててたよね？ どうしてわかったの？」

「ああ、あれか。……彼女に交際相手はいないって話だったけど、彼女の腕時計は海外のブランドものだった。そして、巡査の腕には同じブランドの紳士モデル……」

一度そこで話を区切り、私は峰の方を見た。

「犯罪組織の報復手口に、似たようなのがある、って言ったよね」

「え？ う、うん。言ったよ……？」

「巡査は、それを完全には真似ることができなかった。君も言ってたよね、雑だ、って」
峰にもある程度わかってきたようだ。

まさか、と言うように目を丸くしている。

「二人は恋人同士だったのだろうね。……職場には、内緒の。だから巡査は、例え遺体であ

ろうとも、彼女の体に酷いことはできなかつた。そうしないと、犯罪組織の仕業に見せかけられないと分かつていてもね……」

「す、すごいねー……りこりん全然分かんなかつたよ……」

当たり前だ。だって私は天才で、名探偵なんだから！

ある組織にて。

「どうしたんだい、理子君」

オールバックで髪を整えた20歳ほどの男は、訪問者の方をちらりとも見ずにそう話しかけた。

しかし、名前を呼ばれた峰 理子は驚きもせず男に少しだけ近寄つた。

「教授」

教授と呼ばれた男は、ようやく峰の方を振り向いた。

その顔には、余裕そうな微笑が張り付いている。

「江戸川 キリリーーあの子は、危険だよ」

峰は、教授とは真逆に真剣な表情で話す。

数日の間で見た、江戸川 キリの異常性。

「入試ですごい成績出したって話題だったから、あたしは声をかけたんだ。でも、今日までは目立った活躍とかも無かったし、ただの自称天才だと思ってた」

そう、つい昨日まで、峰は江戸川 キリのことを教授に比べると凡人レベルに過ぎないと思っていた。

今日、一緒に依頼に行っていないければ、入試での成績は偶然だと済ませるつもりだった。

しかし、今日——昨日までの認識は、呆気なく翻った。

「今日、キリの依頼についていったんだ。ろくに自分で調査しないし、その割に大口叩くし、最初はホントにダメだなー、と思ったよ。でも、——あたしの認識が甘かった。誰も手がかりをつかめていない、難事件を、キリは——」

「解決した、かい？だが、それだけではないようだね？」

教授の言葉に、峰は知らぬ間にうつむいていた頭を持ち上げる。

その表情は、決して明るいものではなかった。

「司法解剖も終わっていないのに、犯人が誰で、いつどこで殺して、どこに証拠があった、——どうすれば犯人が自白するのかまでわかったって言うんだ。実際、キリは真実にたどり着いていた」

あの現場には、15分もいなかった。それだけの短時間で、江戸川は事件を解決して見せた。

そして、言葉一つで巡査に証拠品の所在を話させた。

自分で地道な調査なんて一切しなかった。

同じ探偵科のAランクである峰でも、あの事件を解決するにはもつと調査をしなければならなかった。

江戸川が名探偵には必要ないと言った、調査を。

「ふむ……江戸川 キリ、か。この時代にも、それほど頭脳を持つ者がいるとはね」
教授は、まだ江戸川 キリを甘く見ていた。

事態を樂觀視していた。

それもそのはずだ。

なぜなら、峰が見た江戸川は、まったく本領を發揮していなかったのだから。
そして彼らが理解するころには、もう遅いのだ。

江戸川が、組織を脅かすような存在であることを――

遠山キンジの災難

今日は日曜日。

学校も無く、家で過ごすという選択肢もあつたのだが、何となくそれは憚られた。

だから、俺は仕方なく出歩いていたのだが――

「何だ、あれ」

チヨコレート色のハンチング・キャスケット帽に、同色のコートを羽織つた人物が駄菓子をいっぱいに詰めた紙袋を抱えて、駄菓子屋の前に立っていた。

よく見ると、武偵高の女子制服を着ていることがわかる。

嫌な予感がしてすぐに立ち去ろうとしたが、運悪くその駄菓子女は振り向いてしまった。

「やあ、遠山じゃないか！奇遇だね」

切れ長の目に、遠くからでも楽しげな色が浮かんでいるのがわかる。

両手で抱えていた紙袋を器用に片手で支え、空いた片手をこちらに向けてぶんぶん振っている。

黙っていればクールな美人なのだが、彼女は相当な変人である。

そしてそれは、入学初日の自己紹介から皆に知れ渡っていた。

(峰 理子を除き)皆が当たり障りのない挨拶をしていたというのに、彼女は自己紹介の序盤でとてつもないインパクトを与えた。

何と言ったかというところ……これは後に置いておこう。

「…キリ」

さすがにそこまでされては無視できず、俺は仕方なく名前を呼んだ。

自称天才の駄菓子子は、俺と同じクラスの江戸川 キリだ。

彼女は軽快に駆け寄ってくると、俺に紙袋を差し出す。

「ちようどよかったーこれ持つてて」

予想外の行動に思わず受け取ってしまった自分が憎い。

「ちよ、おいー」

キリは俺に背を向け、また駄菓子屋に戻る。

おい、これだけ買って置いてまだ買う気か。

持っていると言われた手前そのまま立ち去ることもできず、俺はキリの側にいることにした。

随分と楽しそうに駄菓子を手を取っては、子供用の小さな買い物カゴに詰めていく。

こんなやつでも一部の男子には人気があるようだが、俺には全くもって理解できない

い。

「というか、どれだけ駄菓子を買うんだよ。もうそのカゴいっぱいだよ。」

それでもまだ時間がかかりそうだったので、俺も売られている駄菓子に目をやる。お、俺が小さい時に売られてた駄菓子もあるんだな。

懐かしい、兄さんと一緒に買った覚えがあるぞ。

「おばちゃん、これちよーだい！」

「どうやら買い物は終わりらしい。」

子供のようなヤツではあるが、買い込む量は尋常じゃない。

おまけにあの量の駄菓子に、瓶のラムネを10本ほど追加してやがる。

まさかこのまま俺を荷物持ちにするんじゃないだろうな。

「ラムネも重いから持って」

「そのまさからしい。」

「おい、どうして俺がー」

「いいじゃないか、どうせ暇なんだろう？」

凶星だ。

反論しても論破されそうなので、ここは大人しく従うしかないようだ。

「それ、私の部屋まで運んで。ほら、行くよ」

「待て！お前の部屋って女子寮だろ？俺が気安く出入りするわけには、」

「この時間は寮にいる人って少ないから、だいじょーぶ」

そういう問題じゃないだろ：

その後も文句を言おうとする俺を無視して、キリはどんどん歩いて行く。

そしてそれに、何だかんだ俺も付いて行ってしまうのだった。

女子寮のとある一室。

俺は、とうとう来てしまった。

さあさあ、と俺の背中を押して半ば無理やり部屋に招き入れたキリは、駄菓子を乱雑にちやぶ台に置く。

「どうしたの？入りなよ」

玄関に立つ俺に、キリは不思議そうに声をかけた。

ここまで来て引き返すのもアレなので、素直に従う。

思っていたよりも散らかってはいないが、それはおそらくまだ荷解きができていないせいだろう。

隅に積まれた段ボールがそれを物語っている。

入学してから数日経っても片付けてないのかよ。

しかし、それを差し引いても女子の部屋にしては、少し殺風景だった。

「意外だな。お前のことだから、もっと本とか置いてあるのかと思った」

正直な感想だった。

天才だ何だと言うキリのことだから、本で色々知識をつけているものだと思うっていいのだ。

「私の嫌いなものは、無駄な知識と常識だからね！」

笑顔で話すことじゃないだろ。

常識が嫌いって、どういうことだよ。

ますます江戸川 キリという人間がわからなくなる。

「あ、荷物机に置いて。あと、ラムネ二本出して」

思わず自分で出せと言いたくなるが、ラムネの袋を持っているのは俺だ。

荷物を置いてから、はいはい、と二本取り出して渡す。

「ご苦労！特別にラムネを一本君にあげよう！ここで飲んでいくといい」

一本返された。

自分で二本飲むんじゃないかって、くれるつもりだったのか。

貰えるものはありがたく貰っておこう。

キリは机の前に座り、ラムネを飲み始めていた。

それに習い、キリと向かい合うように座って俺もラムネを開ける。

瓶を傾けると、ビー玉の転がる涼やかな音がした。

「君はどうやら女嫌いのようだから、断られると思つてたよ」

目の前のキリは、何を考えているのかわからない笑顔で座っている。

「女嫌いだとわかつていて強引に誘つたのは誰だ」

言い返してみれば、キリは何が面白いのか声を出した笑い出した。

「あははは！君はいつでも私の誘いを断ることができたさ。なら、それをしなかったのはどうしてか——君の女嫌いは、過去の女性関係に起因しているのだろうか？」

一瞬動揺してしまつた。

探偵科の、ましてやAランクの生徒にそんなところを見せては、肯定したも同然だろう。

「しかし、いざいざがあつた女性たちと、私では性格も態度も大きく違つた。だから君は、私には隙を見せた」

自分でも理解しきれていなかったことを、キリはすらすらと言ひ当てていく。

「その女性関係は、君の何らかの特徴が招いてしまつたことだろう。それは、人と関わる

のが得意でない君の性格からも推理できることだ。しかし、流石の私でも知らないことは推理できない。だから私は、異性が関係する「特徴」を、少し調べてもらった」
ラムネ瓶を握る手に力が入る。

ごくり、と唾を飲み込んで、不敵に笑うキリから目をそらした。

「ヒステリア・サヴァン・シンドローム」

ああ、くそ。

こんなに少ない情報から、見抜く人がいるなんて。

「その反応からするに、当たりのようだね。…これは、ついでにある人から聞いたことだけど、遠山金一という武偵は、君の兄だね？」

どこまで知っているのか。

目の前のキリが、何か得体の知れないものに思えてきた。

「ところが、おかしいね。彼の仕事の依頼人は、遠山カナという女性が来たというんだ。これも、そのヒステリア・サヴァン・シンドロームが関係していると考えられる。おそらく遠山金一武偵は、女装することで性的興奮して、HSSになるんじゃないか？」

兄のことも、すべてキリは知っている。

こんなにはやくヒステリアモードのことがバレたのは初めてだ。

最も驚きなのは……キリが、一度も俺がヒステリアモードになったところを見たこ

とがない、ということだ。

なのに、真実にたどり着いてしまった。

ふと、中学の時のことが蘇る。

「恐れなくてもいい。私は、君を利用するつもりなんてないからね」

キリは、急に興味を無くしたように不敵な笑みを消した。

しかし、まだ油断はしない。

俺はそらしていた目線を、もう一度キリに向けた。

「本当か？」

「だって、利用なんてしなくても、君はこうして荷物持ちをしてくれるだろう？」

その言葉があまりにも予想外で、俺は目を丸くする。

「で、でも——」

「他の人に言ったりなんてしないよ。そんなことしても意味ないだろう？ そんなことよ
りさ、ビー玉取って」

もう俺の話題はどうでもいいのだろう。いつの間にか、キリはメガネを外していた。

空っぽの瓶を揺らして、その中のビー玉を見ている。

自己紹介の時の、キリの言葉が浮かぶ。

『私は江戸川キリ。君たちのような愚かな人を守る、世界最高の名探偵だ！』

あながち、全てが嘘ではないようだ。

少しくらいは信用してやってもいいか。

俺はちよつと警戒を緩めて、キリから瓶を受け取った。これ、割るしかないんじゃないかな

いか。

「あ、あと…君のお兄さんに会ってみたいな」

は？

遠山金一の驚愕 前編

私とキンジは、今巢鴨に来ている。

キンジのお兄さん、金一さんに会うためだ。

ちなみに呼び方が変わっているのは、さすがに遠山呼びだと色々不便だからだ。

私がキンジに、お兄さんに会いたいと言ってから一週間が経った。

キンジはあれからお兄さんに連絡して都合をつけてもらい、遠山家で会うことになった。

何か流れてキンジの祖父母にまで会うことになったのは、まあ頼んだのは私なので許そう。

道中で、結婚前の挨拶みたいだね、と言ったら無言で頭を叩かれた。

この名探偵の頭脳になんてことを！

「いいか、兄さんの前で間違ってもカナのことを口に出すんじゃないぞ」

どうやらいつのまにか到着していたようだ。

玄関前で立ち止まり、キンジがそう聞く。

「その様子じゃ、当人は女装に恥じらいを持っていてるようだね」

ああそうだ、と私相手に誤魔化すことは無意味だと学習したのか、キンジは素直に認める。

そして私が了承していないことに気づかず、玄関を開けた。

「おかえり、キンジ。あれまあ、可愛い子を連れてきたねえ」

出迎えてくれたのは、おばあさんだった。

話に聞いていたキンジの祖母、セツさんだろう。

「おいキンジ、お前人を連れてくるとは聞いてたが、女の子なんて知らないぞ」

おお、この人が金一さんか。

キンジよりも美人さんだ。

「はじめまして、私は江戸川 キリ。愚かな人たちを守る、世界最高の名探偵だ！」

武偵高の最初の自己紹介でも言ったようなことを、私は胸を張って当然のように言った。

キンジは、隣で早くも頭を抱えている。

「気にしないでくれ、キリは終始こんな感じだ」

「あー、そうか……俺は、知っていると思うが遠山金一だ。それと、こっちは俺たちの祖母の、遠山セツ」

どうせ変なやつだと思っっているんだろう。

ちよつと面白くないけど、その認識もきつと私の名探偵ぶりを知れば変わるよね!

「ああ、もちろん知っている。何せ、キンジからお兄さんのことを聴く前から、調べはついていたからね」

私は、懐からメガネを取り出して着用する。

「じいちゃんは?」

キンジはセツさんにそうたずねる。

この私が、挨拶がわりに少し推理を見せてやろうじゃないか。

「おじいさん——鐵さんは、今から30秒後に帰ってくる。外出中なのだろう?…おそらく、セツさんが買い忘れた豆腐を買いに行っている。行き先は少し歩いたところにあるスーパーマーケットだ」

答えようと口を開きかけたセツさんに話す暇は与えず、私は自分の推理を披露する。

しばらく誰も喋らなかつた。

そして、きつかり30秒後——

「ただいま——お、もう来ておつたか、キンジ。なんじゃ、隣の別嬪さんはキンジのコレか?」

おじいさんが現れ、にやにやしなから小指を立てた。

コレ、と言って小指を立てる意味はよくわからないが、おそらく恋人なのかと聞いて

いるのだろう。

「私とキンジはそんなのじゃないよ、鐵さん。ただのクラスメイトだ」

セツさんは、別段驚いた表情は見せない。

私たちより経験豊富であるおかげかな？

亀の甲より年の功とはよく言ったものだね。

「30秒、ぴったり…」

金一さんは数えていたらしい。

「金一さん、どう？当たってた？」

「…全部、大正解だ」

私は満足してメガネを外した。

一人だけ状況を知らない鐵さんは、不思議そうにしていた。

所変わって、遠山家の居間。

着いたのが昼食前だったため、そのままご飯をいただくことになった。

その準備にセツさんは台所で料理をしている。

鐵さんは、若い人だけで話したいこともあるだろう、と配慮して席を外していた。

つまり、居間にはキンジと金一さん、それから私の三人がちやぶ台を囲んで座っている。

口火を切ったのは、金一さんだった。

「まず、どうして君は俺に会いたいと？」

何だ、そんなことか。

そういえば、キンジにも話していなかったな。

「一番は、HSSになった時、どうなるのか見てみたかったから。——キンジで試しても良かったが、それだと彼が嫌がるだろう？だから、自在になれる金一さんを訪ねた」理由として最も大きいのは、今話したことだ。

キンジも金一さんも、これは意外だったらしい。

表情に表れている。金一さんの方はわずかな変化だったが。

「キンジ、HSSのことを話したのか」

「いや、私がすべて推理した」

すべて、の部分強調する。

キンジに向きかけていた金一さんの視線は、再度私に向けられる。

「金一さんのこともね。そんなに警戒してなくてもいい。大して興味はないしね」

本心だ。この言葉をそのまま受け取るとは思っていないけど。

「…はあ。仕方ないな。昼食後なら構わない」

すっごく苦い顔してるね。

だが一応了承してくれた。

HSSの理論的なことは知っているが、実際どういう感じになるのかは見てみないとわからない。

個人差もあるだろうしね。

だから文献だけでなく、直截この目で見たかった。

「君は、どうして武偵になろうと思ったんだ？」

間を置いて、金一さんが質問してきた。

普段なら答えるのが面倒だと一蹴しているが、頼みごとをってしまった手前仕方なく口を開く。

「つまらないことを言ってしまったえば、武偵高に入った方が色々と楽だったからだ。父さんもちよつと乗り気だったし、私にはこの最高の頭脳があるしね！」

自分が武偵として生きること、あまり違和感はない。

当たり前のように銃を持ち、当たり前のように殺伐とした会話をする生活に、もう慣れてしまいそうだ。

武偵、というか私は名探偵なのだが、専門科目的にはしていること大差はない。

「お前、そんな適当な理由でなろうと思ったのか」

キンジが若干呆れたように言う。

はじめの理由は適当であろうが、私は今歩んでいるこの道に満足している。

「そうか…もうひとつ、いいか」

「お昼ご飯まで暇だし、大サーブスだ！特別に許可しよう」

滅多にないぞ、こんな機会。

私の機嫌が良いうちに、はやく質問することをおすすめするよ。

ああでも、質問の内容には少々気をつけてほしいけど。

「君は、その、どうして自分が名探偵だと思いはじめた？」

自称名探偵だと思っているような口調が少し気に入らないが、今の私は結構機嫌が良い。

「ある人、っていうか名前言ってもいいか。あー、福沢さんがね、言ったんだ」

『その頭脳で真実を切り裂け。闇に隠れた悪を薙ぎ払え。お前にはそれができる。お前は世界一の名探偵なのだから』

福沢さんは、私がまだ自分を周りと変わらない凡人だと思っていた時に出会った人だ。

そして、私が特別なんだと気づかせてくれた張本人でもある。

2、3年の歳月を共に過ごした。

それだけで、福沢さんは私に最も影響を与えた人だった。

福沢さんがいなければ、私は――

「その時から、君は名探偵なのか？」

彼方に飛びかけていた思考が戻る。

しかしそれを悟られぬように、私は笑顔を作る。

「ひとつ、つて言つてたのに、これでふたつめだよ？でも、答えてあげないこともない。これで最後だからね？……答えは、イエスだ。あの時から私は自分が名探偵なのだと思付いた。それを職業にするとか、そんなことはちつとも思つてなかつたけどね」

武偵高を選んだのは、本当に偶然だ。

探偵を本格的に職業として始められるのだと知り、最初に言つたように楽そうだったからそこにした。

……もう質問はないかな。

「ご飯の準備ができたから、準備しておいで」

セツさんの声が聞こえた。

和食の良い匂いがする。

やっぱりあの豆腐は、味噌汁になったようだ。

遠山金一の驚愕 後編

私は、弟のキンジとその友人、江戸川 キリと一緒に散歩することになった。

キリの要望に私が便乗し、それにキンジを付き合わせている形だ。

「何で俺まで巻き込むんだ…カナとキリだけでもいいだろ…」

そのため、キンジはさつきからこの調子で下を向いて歩いている。

「あらキンジ、何か不満でもあるのかしら？」

「…なんでもない」

ちよつと文句を言いながらも、何だかんだで付き合ってくれているキンジは、我が弟ながら優しい子だと思う。

「駄菓子屋はないの？ラムネ飲みたい」

二歩分くらい前を進むキリは、そう言いながら周りを見渡した。

「もう少し歩けばあつたと思うけど」

昔の記憶を辿りながらそう伝えれば、キリは嬉しそうに振り向いた。

「ほんと!?どつちなの?」

「そのまま真つ直ぐ歩けばいいわ」

この子供のような言動からは、キリが世界的にも素晴らしいであろう推理力を持っているとは夢にも思わない。

でも、実際私は目の当たりにしてしまったのだ。

どうやったのかもまったくわからない、見ていたんじゃないかと思うほど正確な推理を。

「お前、またラムネ飲むのか？」

「だつておいしいでしょ、ラムネ」

どうやらこの子はよくラムネを飲むらしい。

そういえば駄菓子も好きだと聞いた。

もしかしたら、推理で酷使した脳の栄養補給のために、お菓子を食べているのかもしれない。

本人にその自覚は無さそうだけど。

私はずっとカナでいると睡眠期がやってくる。

脳を休めているのだ。

それと、キリの駄菓子を摂取することは、多少似ているのかもしれない。

「ほら、あそこよ」

先の方に少しだけ見えたお店を指差す。

教えると、キリは突然帽子を抑えながら走り出して駄菓子屋の前で止まった。

キンジも一緒に慌てたように走る。

私は歩調を変えずに、ちよつと遅れて店に着いた。

「おばちゃん、ラムネ！」

店にいたおばあさんは、そんなキリを見て微笑んだ。

小柄でかわいらしいおばあさんだ。

おばあさんは近くの棚からラムネを取り、キリに手渡す。

キリはがま口の財布から小銭を出して、たくさん皺が刻まれたおばあさんの手に優しく落とした。

「キンジとカナさんは？」

急にこちらを向く。

その表情はとても嬉しそうだ。

「私はいいわ」

「俺もいいわ」

そんなキリを微笑ましく思いながら、おばあさんに会釈して店を出た。

ラムネ瓶に入ったビー玉は、キリが歩くたびに綺麗な音を立てる。

「キンジ、また後でビー玉とって」

「ああ、それはいいんだが……この辺りに公衆トイレか何かなかったか？」

キンジがさつきからそわそわしていると思つたら、そんなことだったのね。

「それなら、少し遠いけど公園にあつたはずよ。私たちは、ゆっくり歩いてるわ」

「すまん、ありがとう」

キンジはそう言つて走つていった。

キリに、行こうか、と声をかけようと思つたが、彼女は通つて来た道の先をじつと見つめていた。

笑顔は消えている。

不思議に思い視線の先を辿ると、黒っぽい服装の男性がひとり歩いてくるだけだつた。

本当にどうしたのかしら。

あの男性に何かあるの？

尾けているなら私やキンジが気づかなかつた訳がないし、男性が不審であるとか、そんなことはないように見える。

男性は徐々に近づいてくる。

そしてそのままキリを通り過ぎようとした時、

「あんた、ここにくる前に人を殺したね？」

キリは男性に言う。

真つ直ぐ目を見てそんなことを言われた男性は、立ち止まる。

「いきなり何なんだ、私は人を殺してなどいいない！」

男性はおそらく30代、中肉中背で背広を着ており、仕事用なのかカバンを持っていた。

私には、普通の営業マンに見える。

「ふーん。あ、行こうか、カナさん」

「え？いい、いいの？」

キリはふつうに歩き出そうとする。

「ま、待ちなさい。私が殺人犯ではない証拠を見せましょう。一緒に来てください」

「え、やだ」

本当に彼は殺人犯なのだろうか。

だとしたら、武偵として逮捕しなければならぬ。

「キリ、証拠はあるの？」

「その鞆の中にあるべつとり血のついたナイフ。他にも調べれば出てくると思うよ。過去に何人も殺した、連続殺人犯みたいだし」

男は顔をひきつらせる。

私は自分の武装を確認しつつ声をかける。

「すみませんが、ちよつと来てもらえますか?」

「つ、くそ!」

逃げるのか、と思いきや鞆から血で染まったナイフを取り出した。

そう来たか。

男の手から離れた鞆は、重力に従って落ちた。

こちらに向かつてきた男のナイフをまず避ける。

それからナイフを持つ手首に手刀を入れた。

カラン、と音がしてナイフがコンクリートに当たる。

そのままその手首を掴んで捻り上げ、足でナイフを遠くに飛ばしてから地面に男を組み伏せた。

キリは私が蹴り飛ばしたナイフを、指紋が付かないようにするためか、白い手袋をはめて拾い上げた。

「どーするの、これ?」

「うーん、証拠品だから警察を呼ぶまでは置いていいと思うわ」

「ふーん」

キリは興味無さそうに答える。

そしてナイフを、私物を机に適当に置くような雑さで地面に置いた。

「警察に連絡してくれる？」

「面倒臭いなあ」

キリは手袋を外し、ポケットから携帯を取り出した。

面倒だと言いながらも、きちんと連絡してくれるらしい。

「もしもーし、武偵高の江戸川 キリだけだ。今偶然連続殺人犯を捕まえちゃってさあ。

…え？場所？巢鴨の何処か」

すごく不安になった。

まず敬語じゃないし、すごく軽い口調で結構衝撃的なこと言ってるし。

私は一度ため息を吐いて、彼女にこの場所の詳細を伝えた。

キリはそれを一言一句変わらずに警察に伝え、電話を切る。

警察を待つ間に、気になることを聞いてみようか。

「どうして、この人が連続殺人犯だとわかったの？」

「今日は休日なの、それも昼間だよ？まずこんな格好の人がいること自体おかしい。当然

疑うよね」

それは確かに私も思ったことだ。

でも、この男は一切不審な様子が無かった。

さらに理由を問おうとして、やめる。

キリは間違いない天才だ。

キンジは確か、そう言つて私に彼女の話をしていた。

それは出会い頭に祖父の所在を言い当てた時から、疑いよりの無い真実となつた。

きつとこの子の目は、私には見えていなかった多くの手がかりを捉えていたのだらう。

「では何故、見過ごそうとしたの？」

「興味無かつたから」

思わず口をつぐむ。

真顔で答えたキリに、何も言えなくなつた。

「そいつが連続殺人犯で、罪を逃れて逃亡中であろうが、私にはどうでもいいことだからね。私は、社会正義や倫理観で名探偵をやつたことなんて一度もない。面倒臭そうだったので放置したかつたんだけど……：……：……：それも行かなかつた」

私のせいだとも言いたいのか。

と思つたが、当人はそんなつもりでは無さそうだ。

「あ、キンジ」

キリがいきなり私の後ろを見て声をかける。

振り返ると、キンジが不思議そうな顔をして立っていた。

「どう言う状況だ？」

あれから警察署で事情を話し、ようやく解放された頃にはもう日が暮れかけていた。随分長い一日だったように思う。

「はー、半日無駄になったじゃないか。どうして名探偵の私があんなことをー！」

事情を話すのが長引いた原因は、キリにある。

警察相手でも自由奔放な振る舞いは全く変わらなかった。

挙句に警察を馬鹿にするような発言の数々：キリに振り回されることになってしまったのだ。

頭は良いのに、どうして礼儀だけはどうにもならないのだろう。

「ほら、もうすぐ着くわよ。夕ご飯も食べていく？」

「あんまりお腹空いてない！それに、そろそろ帰る」

どうしてだろう。

不思議と、不遜な態度を許してしまうのは。

そうさせる魅力が、この子にはあるのかもしれない。

「連絡先、交換しない？」

「私やり方分かんないから、カナさんがやって」

ぼん、と携帯を渡される。

よく連絡先の交換方法も知らずに使っていたら駄目なものだ。

『遠山 金一』と登録された連絡先を確認してから、携帯を返す。

私は、キリの登録名に『江戸川』と打って、少し迷ってから消す。

『名探偵 キリ』

これでいい。

武偵高のとある男子寮の一室。

日が沈み、完全に暗くなってから俺とキリは武偵高にようやく帰れた。

寮が違うキリとは途中で別れ、寮へ帰る道を歩きながら一人考える。

駄菓子屋で会ったあの時、キリは両手で抱えなければいけないような紙袋を手に、まだ駄菓子を選んでるようだった。

そしてタイミングを計ったかのように振り向いた。

もしかしたら、と俺は思う。

あの時、俺があそこを通るとわかっただけで、駄菓子屋で待ち伏せていたのだとしたら。まさか、とは思うが、否定はしきれない。

キリは一体、何処まで読んで行動していたのだろうか。

もしかして、自分はキリの手のひらでいいように転がされていたのではないだろうか。

ワインレッドの陰謀

「あ、江戸川さん！」

星伽が私を見かけるなり、駆け寄ってきた。

廊下は走らない方が良いぞ、星伽。

周りに花でも咲いている幻が見えそうな華やかな笑顔に、周りの生徒たちは男女問わず星伽に視線を向けた。

星伽がそれに気づく様子は全くない。

「やあ、星伽」

こうして星伽が寄ってくるのは、少し珍しい。

かと言って全く無いわけでもなく、何度かこういうことはあった。

普通に話しかけてくることもあれば、まるで私に縋り、私を追ってきたかのように呼ぶこともある。

私には未だこの謎は解けていないし、解くつもりもないのだが。

「もしかして、これからお昼ご飯？」

「そうだよ。星伽も？」

「う、うん」

星伽は手に持ったお重を少し持ち上げ……って、お重？

何で弁当が重箱？

「あのね、江戸川さん。良かったら、一緒にこれ食べない？」

昼食代も浮くし、何より星伽の弁当は美味しいとよくキンジから聞く。

前々から気になってはいたのだ、この機会に味わってみよう。

「……食堂。」

「ごちそうさま」

「お粗末さまです」

星伽が、漆塗りの重箱の蓋をそつと閉めた。

とても美味しかった。

どうすればこんなに美味しいものを作れるんだろう。

私が作るなんて日はおそらく来ないが。

「それじゃあ本題に入ろうか」

重箱を布で包もうとしていた星伽の手が、ぴたりと止まった。

「気付いてたんだね、江戸川さん」

星伽はそう言って、困ったような笑みを見せた。

「用が無ければ君は私を誘ったりしないだろう」

先ほどのように星伽が駆け寄ってくるのは、何か話がある時だけだ。

その内容はキンジのことだったり、依頼の話だったり、様々だけど。

ちよつと待つてね、と星伽は途中で止めていた手をようやく動かし、重箱を片付ける。

それからきちんと私に向き合い、少し真剣な表情を浮かべた。

「今度のお休み、会えないかな？」

「あー、その日は確か依頼があるんだ。その後なら構わないけど。…いや、なんなら付いてきてくれない？」

私はバスや電車の乗り方がわからない。

だから依頼がある時は、大体タクシーを使ってるんだが、それにはバスよりもお金がかかるからね。

星伽が案内してくれるなら安心だ。

「え、い、いいの？」

いいも何も、星伽を利用しようとしてるだけ…いや、知らない方がいいこともあるか。

「バスの乗り方がわかるなら、付いてきて」

これで多少お金が浮く。

学校自体は休みの日。

だが、私には依頼がある。

そういう理由で休日にも活動している人は、少なからずいる。

「江戸川さん、あのバスだよー」

そしてその依頼に、先日星伽を巻き込んだ。

星伽（実家）の決まりとかなんとかであまり外出しない星伽白雪には、休日が潰れるとかそういう認識はないらしい。

「ああ、あれに乗るの？」

星伽が指差した巡回バスは、こちらにまっすぐ向かってきていた。

やがてゆっくと減速し、私たちの目の前に止まる。

手すりにつかまりながら乗り込む。

思っていたよりも空いていたので、一番後ろの広い席に二人だけで座る。

その所作ひとつを取っても、星伽は非の打ち所がない大和撫子だ。

ひとつ欠点を挙げるとしたら、キンジに対する異常なほどの愛だろうか。

「江戸川さん、今日の依頼ってどんなことなの？」

「そういえばまだ何も言ってなかったか。」

「私は鞆から一枚紙を取り出し、星伽の顔の前に突き出す。」

「脅迫状の送り主を探せって。まあ大体検討はついてあるけど」

『殺人予告』

「お前のせいで人生がくるった。この貸りは返してもらおう。必ず殺してやる。」

「よくある新聞の切り抜きで作られた脅迫状だ。」

「差出人の名はない。」

「警察の手を借りないのは、後ろ暗いことがあるからか。」

「なんせ前にも暴力団に発砲されたことがあるとか聞いたし。」

「脅迫、かあ……」

「紙を鞆に戻す。」

「星伽は表情を少し歪めた。」

「物騒だね」

「そうか？ 同じような依頼を過去に解決した覚えがあるんだけど、そんなに物騒かな？」

「その時は私が名探偵ぶりを発揮し、みごとすぐさま犯人を捕らえた。」

「その会話以降、星伽は何かを考えるようにずっと黙っていた。」

「あ、着いたよ」

ようやく話したと思えば、目的地に到着したらしい。

お金を払ってバスを降りる。

確か依頼者の家は、バス停からすぐの屋敷だったはず……あれか。

いかにも金持ちが住んでそうな家だ。

いや、私の家も風貌こそ違えど大きさはあんなものか。

無駄に大きな門の前に立ち、呼び鈴を鳴らす。

「大きなお家だね」

「どうせ汚い金で建てた家だろう」

星伽は終始落ち着かない様子で、そわそわとしていた。

やがて、この家の主人の奥さんであろう女性が姿を見せる。

柔和な笑みを浮かべつつ門を開けた彼女は、笑みを不思議そうな表情に変えた。

「お待たせしました、探偵さん。…あら、一人と聞いていたのですが…?」

当然の疑問だ。

「ちよつとした手伝い係だよ。いないものと思ってくれていい」

その返答に奥さんが納得したかはわからないが、星伽を招くことを了承はしたよう

だ。

扉の方へと案内され、奥さんはドアノブに手をかけた。
パアアアアンツ

「銃声……？」

星伽が小さく呟いた。

「行くぞ、星伽！」

私は奥さんを押しつけ、乱暴に扉を開く。

音がしたのは、地下の方からだ。

「きゃー！」

重量のあるものが床に落ちる音がした。

何だと思つて背後を振り返ると、星伽が尻餅をついていた。

近くに小さな車のおもちやが転がっている。

「いたた……おもちや？」

「早く行くぞ！」

「あ、うん！」

星伽が立ち上がったのを確認してから、すぐに見つけた地下に続く階段を降りる。

地下にはひとつの扉しかなかった。

ドアノブを回し扉を押したり引いたりしてみたが、ガチャガチャと音が鳴るだけで開

かない。

鍵がかけられているらしい。

「どいて、江戸川さん」

いつのまにか星伽は刀を構えていた。

それでドアを叩つ斬るつもりらしい。

「開けばいいんだから、あまり派手に壊さないでね」

そう忠告だけして、私はドアから離れる。

星伽は、普段のおっとりした様子からは想像できないような表情で刀を振り下ろした。

ドアを壊し、視界が開ける。

真つ先に目に映つたのは、床一面に広がる赤…

そして、その真ん中に倒れこむのは、この屋敷の主人らしき男一人。

死んで、いるのか…？

いや。

「星伽！救急車だ、早く！」

「え!?で、でも…もう助からないんじゃない、」

「床のなら血じゃなくワインだ！早く呼べ、星伽！」

「はいー。」

星伽が、電波の悪い地下から出て行く。

入れ違いに、奥さんが降りてきた。

「何かあつたんですか……ッ！」

見ない方がいい、と言おうとしたが遅かったようだ。

顔を真つ青にして口元を抑え、力が抜けたように座り込んでしまった。

「お母さん、どうしたのー？」

「うー」

階段の上から子供の声がした。

一人は小学生、もう一人はそれ以下だろう。

両方男の子だ。

一方呼ばれたお母さん……奥さんと言うと、その子供の声に答えられる精神状態では無さそうだ。

「ちよつと上で待っていた方がいいよ、少年」

仕方が無いので代わりに答える。

「お姉さん、誰」

面倒だなあ。

どう答えるか考えていると、上から星伽の声が聞こえてきた。

「今ちよつと大変なことになってるから、地下に入っちゃだめだよ？」

「大変なこと？」

子供は星伽に任せておこう。

妹がたくさんいると聞いたことがあるし、子供の相手は慣れているだろう。

私が変に刺激するよりもマシだ。

救急車を待つ前に、再度血のごとく広がる赤ワインに目を向ける。

「奥さん、ご主人は心臓が弱いんだね？…なら、早めに心肺蘇生でもした方がいいよ。あいにく、私はやり方を知らないんだ」

死んだ人間とばかり向き合ってきたからね、と言う言葉は飲み込んだ。

我に帰った奥さんは、危なっかしい足取りでご主人に近づき、心肺蘇生を始める。

顔色は悪いが、こればかりは仕方がないだろう。

星伽は救急車の誘導や警察への対応など、まだやつてもらおうことがあるのだ。にしても、少し暑いな、この部屋は。

現場となった部屋はワインセラー。

ワインは空調管理しながら保管するものだから、室温はちゃんと保てるように良い設備を使っている。

下に視線を落とすと、ワイン瓶の破片が散らばる中、ひとつだけ違うものが落ちていた。

これは…銃弾？

現場は地下で、窓はなく出入り口も星伽が破壊したひとつしかない。

つまりこれは、密室殺人？

私は懐から愛用のメガネを取り出し、かけた。

まだ、警察が来るまで少し時間があるだろう。

私は星伽のいる地上へ上がり、この家の子供二人に笑顔を向けた。

「ちよつと話そうか」

兄は怯んだように後ずさった。

「な、なんだよ」

「あんだよ？」

兄と同じように後ずさった弟は、首をこてんと傾げながら兄の真似をした。

「さつき、君たちの父親が倒れた。原因はおそらく心臓発作だろうね。そう、まさに君の思い通りになったわけだ——」

兄の目をまっすぐ見る。

動揺しているのがよくわかる。

「どういう、ことだよ」

「脅迫状も、作ったのは君だね？ 一部の漢字を間違っていたのや、『くるった』が平仮名になっていたことから、それはここに来る前に検討がついていたことだ。こんな初歩的なミス、大人は犯さないからね」

星伽がこちらを見ているのがわかる。

私はそんなこと、微塵も気にせずに話を進めた。

「現場には銃弾が落ちていた。発砲したと見せかけたかったんだろうけど、これはおそらく前にこの家に撃ち込まれたものだね？…暴力団による発砲事件の。…君が仕掛けた罠は、いたってシンプルだ。君はワイン瓶にヒビをいれ、室温を上げただけ。ワインセラーの室温が高くなっていたのは、君の仕業だ」

子供であれども容赦はしない。

だって外見は小さくとも、中身は立派な人殺しだ。

「でも、どうして室温を上げたの？」

星伽が控えめに口を挟む。

私は星伽の方を一切見ずに答える。

「ワインの発酵を促すためだ。今じゃ自家製のワインを作るキットまで売られているらしいね。それに使われる酵母は、糖分をアルコールと二酸化炭素に分解する。…普通、

ワインはガス抜きしながら適正な温度で保管するんだ。…つと、話が逸れたか。ヒビの入った瓶を、発酵の進む高音で放置すると…爆発する。私たちの聞いたあの音は、銃声でなくその音だったんだ。これなら、犯人がどこにしようが自動で爆発する」

「でも、あの人が部屋にいるタイミングで爆発するとは限らないんじゃない？」

星伽の質問はもつともだ。

確かに、これは偶然にすぎない。

「可能性の犯罪、つてやつだよ。この家には、小さな罠が大量に仕掛けられていた。…心臓の弱いご主人を、殺すための罠がね。例えば、星伽が踏んで転んだおもちやとか。階段に置かれたビー玉とか。椅子に乘せられている画鋏とか。そういう小さな罠を作り続け、ご主人を殺害したのは君だ」

兄は、目を見開いて固まった。

「ただし…この犯罪は、殺意が立証できない。そして例え立証できたとしても、まだ幼い君は逮捕されることはない。…まあ、でも気をつけた方がいいよ。自分の蒔いた種で、自滅しないように」

ほっと安心したように兄は息をついた。

その横顔を、弟は不思議そうに見ている。

やがて警察が到着し、私は私の推理を一通り話してから解放された。今頃子供達も解放され、家にいるのだろう。

奥さんの必死の心肺蘇生の甲斐があり、ご主人はひとまず一命をとりとめたようだ。バスに揺られながら、私はゆっくりと目を閉じた。

弟は、兄の行動の真似をよくする。

兄は階段や廊下におもちやを置いていたことも、弟は知っている。

そして、善悪もわからぬままに真似をする。

…そんなことも知らない兄は、知らずに階段でおもちやを踏み、そのまま階段から――

なんて。

閉じていた眼を開く。

一台の救急車が、バスとすれ違った。

「そういえば星伽、私に何か用があるんじゃないやなかったか？」

今の今まで忘れていた。

今回星伽が同行したのは、これがあつたからなのだ。

「うん、あのね……一緒に、星伽に来て欲しいの」

星伽が真剣な表情で言ったその言葉は、果たしてどんな真意があるのか。

スカーレットの真実

「最近、うちの神社の近くで首なし死体が見つかったらしいの。今回はそれに関係するかもしれないけど……粉雪……私の妹の、ことなんだけど」

そんな前置きのようなものから始まった話を、私は電車に揺られながら思い出した。

「毎日、散歩で神社の前を通るおばあさんの様子が、変だ、って。でも他の人たちはその違和感を感じないらしくて。粉雪自身も、どんな違和感を感じるかとか、そういうのは具体的にわからないみたいなの。ただ漠然と、違和感があるって感じで」

違和感の正体がわからない、なんてよく聞く話だ。

人に対する違和感なんて、特に正体が掴めない。

雰囲気とか、ちよつとした言動とか、そういう言葉でここが違うとは言い表し難い違和感、気のせいで片付けるにはいささか無理がある。

白雪の話は、まだ続く。

「それで、そう思い始めた日がね、首なし死体が発見される数日前で。何か悪いものでも憑いてるんじゃないかって不安そうなの。でも、多分……これは、そうじゃない。だけど何がおかしいのかなんて私にはわからないから……だから、江戸川さんに頼もうと

思っ
て」

面白そうな事件なら、首を突っ込む価値はある。

首なし死体事件についても気になるし。

だから今、こうして私は白雪とともに電車に乗っているのだ。(なお、呼び名が変わっているのはキンジの時と同じ理由だ)

星伽神社に行くために。

窓の外の見慣れない風景を、私はラムネ片手にぼんやりと眺めた。

星伽神社は、武装巫女が守り役をつとめる由緒ある神社だ。

昔からそうなのか、はたまた白雪の時だけそうだったのかは知らないが、白雪には姉妹が多い。

今回白雪を通して依頼して来たのは、そんな姉妹の一人である粉雪だ。

そう、目の前で私に怪しむような目線を送る、ツリ目気味の少女である。

武偵高の制服で胡座をかく私とは正反対に、きちんと足を揃えて正座している。

星伽神社に到着した私は、すぐに客間らしき部屋に通された。

白雪は先ほど、お茶を淹れると言って席を外した。

「ねえ君、毎日神社の庭の掃除を一人でしてるの？」

粉雪がおじいさんを見かけるのは、朝の掃除中とのことだった。

それで質問してみたんだが、彼女は眉をひそめて不機嫌そうだ。

「…いえ、何人かですています」

「君だけ？違和感を感じたのは」

「…そのようです」

不機嫌そうな顔はそのままに、粉雪は淡々と答える。

「君は、例のおばあさんとよく話していたんだね」

返事は返ってこない。肯定とみなしていいのだろう。

粉雪は目線を逸らし、それきり口を開こうとはしない。

「お茶、どうぞ」

白雪が丁寧な所作で入室し、私の前に茶柱の立ったお茶を置いた。

その隣に、美味しそうな茶菓子も並べられる。

白雪は粉雪の隣に、綺麗に正座した。

粉雪が話そうとしないのをいいことに、私は茶菓子に手を伸ばす。

口に入れば、優しい甘さが広がった。

うん、美味い！

何か白雪に買わせようと思っていたが、茶菓子を持って来たのでいいだろう。

「粉雪、あの話を江戸川さんに」

「…はい、お姉様」

私と二人きりの時よりも、ずっと優しい表情で白雪を見た後、粉雪はまた不機嫌な顔で私を見る。

相当姉が好きなのだろう、というのには誰が見てもわかることだ。

「私が、おばあさんー木根さんをおかしいと思うようになったのは、首なし死体が発見される数日前です。いつも通りの時間に神社の前を通られたので、挨拶しました。しかし、何だか…少し、引つかかって」

白雪に前もって聞いていたのと、同じ話だ。

「その日からもう十日が経ちますが、毎日木根さんを見かけました。でも、おかしいと思う気持ちは消えなくて。…それが、たまらなく気味が悪くて、お姉様に相談しました」

「話を聞いても私にはどうしようもなかったから、江戸川さんに依頼することにしたの」

姉妹は揃って不安そうな表情を浮かべる。

白雪は、私に縋るような視線を送った。

これは学校の任務外である。

私には拒否権があるし、第三者からすればそもそも私が依頼を受けるメリットなど皆

無だろう。

恐らく利を求める武偵のほとんどは、
「断る」とだけ言って済ませるような案件だ。
しかし、私は違う。

「わかった。その違和感なら、今すぐに解明してやろうじゃないか」

「今すぐ……？」

粉雪は怪訝そうにした。

私の名探偵ぶりをまだ知らないのだ、無理もない。

「ここに来る前からある程度わかっていたけどね」

そう、白雪に話を聞いた時から、大体推理は出来上がっていた。

「まずは首なし死体の話かな。……白雪、どうして犯人は首を隠したんだと思う？」

私は白雪に話をふる。

白雪は、少し考える素振りを見せた。

「そういう嗜好——首の収集癖とか？」

普通はそう思うものか。

「そういう犯罪者は、確かに存在する。……が、今回の事件は違うな。全く違う、とは言い切れないが。白雪、私は首を持ち去った理由ではなく、隠した理由を聞いているんだ」

結果、首なし死体が出来るのは変わらないが、表現ひとつで可能性は無限に広が

る。

あ、と白雪が小さく声をあげた。

「えっと……死体の身元の判明を遅らせるため？」

自信なさげに声が小さく、語尾が揺れている。

その隣で話を聞く粉雪は、不思議そうに眉をひそめた。

「せいはい！首を隠した殺人犯は、殺した人に成り代わろうとした。その理由は、それこそ白雪がさつき言ったような、嗜好、とかそういう類のものだろう」

ここまでくると、流石に話も見えて来たのだろう。

姉妹は大きく目を見開く。

粉雪は、すっかり青ざめてしまっていた。

「木根さん……だったわけ？その人は、先日見つかった首なし死体だろうね。粉雪が見ていたのは、それに成りすました殺人犯だ」

白雪は、衝撃の事実を知ってしまった粉雪を気遣うように顔を覗き込んだ。

下を向いてしまっていた粉雪は、その小さな体を震わせている。

「木根さんの家族ですら、成りすましには気づかなかった。それほどかの殺人犯は、完璧になりきっていたということだ。……それに気付くなんて、君は素晴らしいと思うよ」

「そ、んな……そんな推理は、出鱈目です！そうに決まっています!!」

粉雪は、急に立ち上がって私を睨みつけた。

「粉雪」

白雪がそんな妹を諫めようとするが、なんとやっていいかわからずに視線を彷徨わせる。

「信じないのは勝手だが、今日の夕方には首なし死体の身元判明のニュースが流れるだろうね。もう君が木根さんにも、殺人犯にも会うことは無いということだ」

「それも、推理ですか」

妙に確信を持って言われたその言葉を、私は否定しなくなった。

「それによる未来予知だよ」

その方が格好いいじゃないか。

「粉雪、江戸川さんはすごい探偵さんだ、って話したよね。…多分全部、本当のことだよ」

ようやく焦点を粉雪に合わせ、白雪はそう言った。

粉雪は、みるみるうちに瞳に涙を溜め、しまいには白雪に抱きついて泣き出した。

その光景を視界の端に置き、私は一人考える。

この殺人犯は、私が今まで解決したどの事件の犯人とも違う。

捕まえるのが困難で、だからこそ面白い。

この殺人犯と会うのが楽しみで、私は依頼を引き受けたのだ。

せいぜい楽しませてくれたまえよ？

シグナルレッドの策略

妹、粉雪の、あのひどく青ざめた表情を、私はきつと忘れられない。

知らない方が良い真実もあるのだということを、初めて実感した瞬間だった。

——もうひとつだけ、どうしても忘れられそうにないことがある。

粉雪に向かい合う江戸川さんの表情。

恐ろしい話をしているというのに、そうとは思えないほど楽しそうなああの笑顔を。

……どうして、江戸川さんは笑っていたんだろう。

布団の中で、私は目を開く。

誰かが話をしている。

まだ朝日は東の空に隠れていて、辺りは暗い。

襲い来る眠気のせいかな、誰が何を話しているのかなんて気にもとめなかった。

私はもう一度目を瞑って、眠気に身を任せました。

それを後悔することになるとも知らずに。

『先日の首なし死体の身元が判明しました。遺体は――市在住の木根――さんと見られており、――』

昨日の夕方頃からずっと流れているニュース。

結局、江戸川さんの推理通りだった。

粉雪はそれから部屋に籠ってしまっている。

私は客間で眠っているはずの彼女のところに歩いていく。

朝ごはんの準備ができたから、これから起こさなきゃいけない。

「江戸川さん」

襖の奥に呼びかける。

しかし、物音ひとつ返ってくることはなかった。

「江戸川さん？」

やはり何も聞こえてこない。

「失礼します」

断りを入れてから、恐る恐る襖を開く。

布団はもぬけの殻だった。

何故、とかどうして、とか思うよりも先に、やっぱり、と思った。

布団に触れると、すでにそこに体温は残っておらず、冷たい感触だけが指に伝わってきた。

出て行って、しばらく経っているらしい。

それでも痕跡を探して布団を完全にめくると、紙束がぼさりと音を立てた。

『首なし殺人事件に関する資料』

6月末日までの被害は三件。うち二件は指紋により身元が判明したが、頭部は全く見つかっていない。』

「首なし、殺人事件……」

どうやらその資料のようだ。

資料は複数枚に渡っており、すべての事件に関して、わかりやすく綺麗にまとめられていた。

どうして江戸川さんが、こんなものを……？

江戸川さんは、探偵科の中でも推理はずば抜けているが、尾行などの調査は得意ではないらしい。

そもそもパソコンなどの電子機器の扱いが苦手で、調査資料の整理もろくにできないとか。

それでも彼女には、それを補って余りある頭脳があった。

尾行などしなくても、証拠の所在を言い当てた。

調査などしなくても、わずかな情報からすべてを推理できた。

きつと、この資料を作ったのは江戸川さんではない。誰かだ。

ぱらぱらと流し見ていくと、最後のページにたどり着く。

地図だった。

ここから少し離れた場所に、赤で丸がされている。

地図の裏には、メッセージも添えられていた。

『今から武装して、星伽神社の前に立っている。この紙を忘れるな。』

あまり綺麗とは言えない字で、そう書かれていた。

武装……？

意味のわからないことばかりで、この通りにすべきかどうか迷う。

でも江戸川さんには、何か殺人犯を捕まえる策があるのかもしれない。

私は、江戸川さんに賭けてみることにした。

紙を掴んで急ぎ足に客間を出る。

そのまま自室に入ると、江戸川さんの指示通りにきちんと武装した。

イロカネアヤメの柄をそつと撫で、心の中で「勝手に出かけてごめんね、粉雪」と謝

罪。

覚悟を決めて神社の前に行く。

神社の前に立っていた人が、私の足音を聞いて振り返った。

「白雪、来たか」

え？

「き、きき、キキキキキンちゃん!？」

驚きで盛大に心臓が跳ねる。

どうしてここにキンちゃんがいるの!？」

「もしかして、キリから何も聞いてないのか」

顔をしかめ、ため息を吐くキンちゃん。

私がこくこくと頷くと、何やら携帯電話を操作しだした。

しばらくして、画面を私に向けてくる。

『金を出すから、明日の朝に星伽神社の前に来い。それから白雪と二人で、地図の場所に

向かえ。資料は燃やせ。』

「てつきり白雪はキリに聞いていると思っただが…」

キンちゃんがるなんて、そんなこと一言も聞いていない。

聞いていたらもうちよつと身だしなみを整えてきたのに。

「これ、昨日江戸川さんから？」

「ああ」

地図、資料…。

十中八九江戸川さんの布団から出てきたものだよね。

そうすると、私が江戸川さんの布団からこれを見つけて、読むことまで彼女は知っていたことになる。

いや、推理なんだろう。それこそ、未来予知の域に達するような推理。

「地図と資料、多分これだよ」

私はキンちゃんに紙束を手渡した。

キンちゃんは難しい顔で資料を読んでから、地図だけを抜き取って私に差し出す。

「持っておいてくれ。どうやら、燃やすのは資料だけみたいだからな」

「ほ、ほんとに燃やしちやつていいの？」

「キンちゃんは紙の表面をなぞるように指を動かす。」

「これは、多分あぶり出しだ。燃やせ、なんて指示をしてくるといふことは、そうなんだろう。みかんなどの匂いはしないから確信はないが、これはおそらく他の液体を使ったな。そこまで詳しくはないから、何を使ったかまではわからないが」

だから江戸川さんは、メールで「燃やせ」なんて言ってたんだ。

でも、どうしてあぶり出しなんて面倒な方法を使おうとしたんだろう。

「私、マッチかライター取ってくるね」

あぶり出しなら、火は小さい方がいい。

私はキンちゃんを置いて、火を探しに神社に戻っていった。

「そろそろキンジが白雪と会ったころかな」

チョコレート色の帽子を押さえながら、私は目の前の人物と対峙する。

黒縁メガネのレンズ越しに見える15、6歳くらいの少年は、こちらを睨むようにして立っていた。

「どうしてここが分かったの？」

その問いに答える義理はない。

ここは、首なし殺人犯の根城となった建物の一室である。

周りには変装用と思われる服やウィッグなどが乱雑に置かれている。

いや、それよりも目につくのは、凶器と思われるチェーンソーか。

天井の隅には、監視カメラが回っていた。

「答えてよ」

「それを知ってどうするんだい?」

少年は黙った。

私はちらりと監視カメラの方を見る。

「どうして、とか何とか言うけど、君はわざと私をここに招いたよね?…この部屋に来るまでに、銃を持った見張りが5人いた」

少年は驚いたように目を見開いた。

どうして、とまた口を動かすが、声は出ていない。

本当に驚いているようだ。

確かに、見張りは完全に気配を消し、物音ひとつ立てずに死角から監視していた。

…だから、何だ?

どれだけ気配を消し、隠れても、そこにいるという事実だけは消せない。

「…君の犯行は、素人にしては完璧すぎた。君に知恵を授けているのは明白だ。そうだろう…監視カメラの向こうから見ている、イ・ウーの教授さん。——それとも、シャーロック・ホームズと呼んであげた方がいいかな?」

カメラに向かって口角を上げる。

少年は黙り込んでしまった。

『見事だよ、江戸川キリ君。そうだ、僕がシャーロック・ホームズだ』
カメラの方から、男の声が出た。

心なしか楽しげなその声は、私を挑発しているともとれる。

『キリ君と僕が話すことになるだろうとは推理していたけど、まさか正体まで知られているとは驚きだ。素晴らしい推理力だね』

私は、シャーロックによつてここに呼び出されたのだ。

粉雪が姉を頼ることも、白雪が私を頼ることも、シャーロックの推理通りだった。

そもそも、少年を利用して粉雪をこんな状況に置いたのはシャーロックなのだ。

そして、こんな回りくどいことまでして、私を呼び出した。

こんな方法を取つたのは、おそらく私を試すためだ。

この事件には、二人の殺人犯が関わっていた。

直接的に人を殺した殺人犯である少年と、間接的に人を殺した殺人犯であるシャー
ロック。

後者は、私が捕まえるのが難しく、会いたいと思つていた殺人犯である。

彼も私に、会いたがつていたようだし。

『君は賞賛に値する頭脳を持つた、天才だ。それも、僕の予想を超える、ね。それに僕のように条理予知^{コグニス}まで使える。精度はわからないが』

シャーロックは、黙ってうつむく私に、さらに言葉が続ける。

『君は、現状イ・ウーにおける最大の脅威だ。その頭脳がどれほどのものか、まだ計りかねているが―――少なくとも、僕の想像を凌ぐほどではあるようだ。君は若いから、まだいろいろな可能性がある。その頭脳も、進化の余地があるかもしれない。だから、殺してしまうには惜しい』

嫌な沈黙が室内に落ちる。

『そこで、提案がある。僕のイ・ウーに來ないかい?…拒否するのなら、無事に帰すことはできなくなるが』

少年がチエーンソーを取るために動いた。

『命は保証しよう。君のように優秀なものなら大歓迎だ。待遇だって、それなりに良いだろう。さあ、どうする?』

冷たく威圧的な声が、ゆっくりと室内に響いた。

「…ん?」

私はうつむいていた顔を上げる。

「ごめん、話が長くてつまんなかったから全然聞いてなかった。……次からもうちよつと聞きたくなるように喋ってくれる?」

「ちよっ」

チエーンソーを手に持った少年が、心底訳がわからないというように声を上げた。

『いいかい、キリ君。こちら側にくるか、それとも死ぬか。二つに一つだ。それとも君は、死にたいのかな？』

「私が死ぬ？ 残念ながらそんな未来はしばらく来ない予定だ。…それに私、興味のない話は頭に入らないんだよね」

監視カメラの奥の表情が、若干引きつったように感じた。

『これは交渉だよ、キリ君。君はその頭脳以外は平凡な人間だ。その少年に、簡単に殺されてしまうような弱い人間だ。命のかかった交渉で、そんなふざけたことばかり言っているとー交渉相手が僕じゃなければもう殺されているよ』

「あ、そう。でも私、上につく人間は選ぶタイプなんだよねえ」

私は肩をすくめた。

「第一ねえ、この世界最高の名探偵である私が、こんなところまで何の対策もせずに脅されに来ると思うかい？」

その言葉に、少年が反射的にチエーンソーのスイッチを押した。

回転する刃がこちらに向けられる。

「嘘だ。発信機の類はないはず」

私はチエーンソーを見つめた。

そして、断言する。

「そんなものは必要ない」

シャーロックは喋らない。

彼にこの展開は、果たして読めていたのだろうか。

いや、きつと読みきれていなかっただろう。

「まだるっこしいなあ。殺すんなら早くすれば？」

少年は、チェンソーを持つ手に力を入れて、私に襲いかかる。

でも残念。もう、勝負は決まってるんだ。

「そこまでだ」

銃声が響いた。

それと同時に、チェンソーが地に落ちる。

部屋の入り口で、少年に銃を向けるのはキンジだった。

「くそッ」

少年は素早い動きで窓から逃げようとする。

「逃げられないよ」

しかし、そこには刀を構える白雪がいた。

峰打ちで少年を気絶させる。

「やあキンジ、白雪」

私がそう声をかけると、白雪はほっとしたように微笑み、キンジはこちらを睨んだ。

「一人で動くな、危ないだろ」

「だいじよーぶ、全部私の推理通りだ」

それでもキンジの目つきが緩むことはない。

手厳しいなあ。

「それに、作戦はもつとはつきり伝えろ」

キンジが私に見せてきたのは、文字があぶり出された紙だった。

『一階の一番東の部屋。犯人はあまり傷つけないように。(ハサミの絵)』

「よくできた作戦書だろう?」

「どこがだ!!」

怒鳴るようにキンジが言い、紙がぐしゃりと音を立てた。

ちなみにハサミの絵は、挟み撃ちにしろという指示である。

きちんと理解してくれたようで何よりだ。

「でも、どうして傷つけないように、なの?」

白雪は不思議そうに首をかしげた。

「殺人の動機、だ」

二人はさらに不思議そうにする。

その様子は滑稽で、少し面白い。

「白雪、君と行った事件の動機……まだ言ってなかったよ。あれと同じなんだよ。どちらの少年も、家族の愛を欲した哀れな、大人の被害者だ。前の事件の犯人は、あまり構ってくれない大人たちを憎んだがために犯行を行なった。だから、確実ではない可能性の犯罪を起こしたんだ」

彼には確かに迷いがあった。

しかし、彼は起こしてしまった犯罪に罪悪感を持たず、手放して喜んだ。

「今回の殺人犯は、親に愛されずに育った子供だ。だから、幸せな家庭の一員に成り替わり、被害者の代わりに愛されようとした」

もつとも、彼が罪悪感を感じなくなったのは……歪んでしまったのは、シャーロットのせいなんだろうけど。

しかし、それが前の事件の犯人との決定的な違いにもなる。

誰かに人生を狂わされ、利用された少年は、加害者であると同時に被害者でもあった。「だから、少し哀れに思ってしまったのかな」

ちよつとした気まぐれにすぎないけれど。

「予想以上だよ、キリ君」

暗い部屋で一人、シャーロックは薄く微笑んだ。

条理予知を外すなんて、これまで無かったことだ。

どうやら武偵高の名探偵は、本当に世界最高の頭脳を持っているようだ。

自由奔放なその性格が、玉に瑕だが。

「推理勝負したら、果たしてどっちが勝つのかな」

全くもって予測不能な名探偵に、シャーロックはひどく興味を惹かれていた。

彼女なら楽しませてくれそうだ、と。

閑話 コーリング・クエスト

首なし殺人事件でも、結局俺はキリに振り回されただけだ。

よくわからないまま呼び出され、使われたことに怒りはない。

ただ、流石と言わざるを得ないキリの賢さを、まだ俺は侮っていたようだ。

究極の推理とも言えるだろう未来予知を、平然とやってのけたあの頭脳。

あぶり出し、という古典的で回りくどい方法を取ったのは、情報の隠蔽と、もうひとつ理由があった。

時間の調整だ。

キリは、俺と白雪の行動をすべて予測し、自分のところに助けにくるまでの時間を完璧に管理していた。

俺からしてみれば、危ない綱渡りでしかないのだが。

『もしもし、遠山キンジ殿で間違い無いだろうか』

誰だ。

星伽神社からようやく帰ってきた矢先にかかってきた電話は、予想以上に面倒臭さそうだ。

ちゃんと携帯の画面で、電話相手を確認してから出ればよかった。

声からして4、50代くらいだろう男性は、名乗るより先に俺の名前を出してきた。

「…そちらは？」

肯定も否定もせずに問い返す。

『失礼、俺は福沢だ。一時期キリの面倒を見ていたことがあり、その縁でキリとは未だによく話す。君のお祖父さん、鐵^{まがね}殿とも知り合いだ』

じいちゃんとキリの知り合い？

そういうえば、福沢という名字はキリから一度聞いたことがある気がする。

「それで、何の用だ」

俺は今帰ってきたばかりで疲れてるんだ。

早く休ませてくれ。

『遠山殿と少々話がしたい。ーキリについてだ』

正直今すぐにも切ってしまいたい。

しかし、この福沢という男、声の威圧感が半端じゃ無い。

「俺から話すことはないぞ」

『話したいのは俺の方だ。…君は、キリがメガネをかけて推理する理由を知っているか？』

見慣れた推理モードのキリを思い浮かべ、ああ、と肯定する。

「確か、暗示で脳の働きを抑えるため、だったか」

バスでそんなことを聞いた覚えがある。

まだ記憶に新しい。

『その通り。あのメガネをキリにやったのは俺だ。あの時は、あれだけで制御しきれていた』

過去形で話していることに嫌な予感がする。

メガネを与えたのがこの人なら、暗示をかけたのもこの人なんだろうか。

『しかし、キリの頭脳はまだ成長過程のようだ。それも、俺の予想をはるかに上回る速さで成長している。…このままではいずれ、メガネごときでは制御できなくなり、じきに暗示は解けるだろう』

この口ぶりからして、これはおそらくキリの知らない事実だ。

それを、この人はなぜか俺に話している。

わざわざ電話までかけて。

『キリには、メガネは脳の負担を減らすためだと言ってあるが、それだけじゃない。キリは特別で、それ故に普通に暮らすことが難しい。日常に溶け込んだどんな犯罪でも、無防備に暴いてしまう。キリが普通に暮らすには、あのメガネは必須だった』

話はまだ続くらしい。

俺は黙って聞いている。

『しかし、キリが普通に暮らすことはもはやもうできない。武偵になってくれたのは、僥倖だ。…しかしキリは、その頭脳以外は普通の少女にすぎない。だから——』

ああ、嫌な予感がする。

携帯を握る手に、無意識に力がこもった。

『君が、キリを守ってやってくれないか』

ああ、面倒だ。

「どうして俺なんだ」

『キリは、君たち兄弟を大層気に入っている。中でも君のことは、取り分け話によく出てくる。それに君は、“遠山”だ。だから君になら、キリを任せられると思った』

「だからって、いきなり——」

『君しかいない。キリは、世界の裏側を暴く光となることができる。しかし、キリ自身が道を踏み外してしまえば、世の中にどのような被害を及ぼすか、見当もつかない。…彼

女が光となれるよう、闇に落ちないように、君が見ていてくれないか』

世界とか、世の中とか、そんなスケールの大きい話なのか。

キリという一人の少女は、世界を揺るがすほどの力を秘めているのか。

突拍子もない話だ。

しかし何故だか、キリならあり得ると思えてしまう。

『彼女が道を違えそうになったら、君が正してやってくれ。：君にやらできると、俺は信じている』

「俺は、そんな大層なモンじゃない」

キリに振り回されてばかりの俺に、そんな大役が務まるわけが無い。

『大切なのは、キリの才に圧倒されず、常に彼女を、一人の少女として、客観的に見てやることだ』

それが俺にできるのだと、そう言いたいのか。

「：キリは、確かに危ういところがある。自分を強く持っていないから、不安定だ」

そう、キリは不安定だ。

悪を倒したいとか、そういう信念が全くない。

ただ、自分が楽しいことをしているだけだ。

「俺に、そんな役ができるとは思えない。だが、友人として、俺はキリが間違えるのを見

過ごす気はない」

『それでいい。礼を言う、遠山殿』

礼を言われるようなことは、ない。

そう言う前に、電話は切れた。

世界とか光とか、そんなことはわからない。キリを導くなんてことも、できっこない。それでも、こんな俺でも、キリの良き友人でいてやることぐらいはできるだろう？

『もしもし、福沢さーん？事件の資料助かったよ。…頼みがあるんだけどさ、福沢さんの情報網を私にちょうだい？…あ、いや、犯罪に関することだけでいいんだけど。イ・ウーについて、ちよつと気になってね。だつてこの私でも簡単には捕まえられない犯罪者だよ？…面白いじゃないか!!…それにね、イ・ウーのやつらとは、いつか正面から対峙しなきゃいけない時がくるような気がするんだ。だから、イ・ウーに少しでも関連がありそうな情報、ぜーんぶ私にちょうだい!!』

エビで鯛を釣る 上

「きりりん!!」

蜂蜜色のツーサイドアップを揺らしながら、理子はキリに飛びつこうとした。

しかし、背後から近寄ったにも関わらず、避けられてしまう。

理子はさつきまでキリがいた場所で盛大に転んだ。

教室近くの廊下だったが、あまり人がいなかったのは幸いだ。

通行人の視線を、キリと理子は意にも介さず話しだす。

「酷いよきりりん!」

「私に飛びつくな!」

がばつと上半身を起こして、理子は抗議したが、呆気なく一蹴される。

キリは、はあ、とため息を吐いて腕を組んだ。

「それで、何の用? 長話になるなら、私の部屋に来てもいいけど」

キリは、専門科目の授業を終え、ちょうど帰ろうとしているところだった。

キリと理子は同じ探偵科である。

しかし、キリは主に依頼に行くことが多く、あまり専門科目の授業には出ていない。

だから、理子と専門科目の話をすることは少なかった。

それで会話が減るのかと言われればそうでもなく、理子はことあるごとにキリに話しかけてきた。

今日のように飛びついて、だが。

「やったー！行く行くー!!」

小さな身長とは裏腹に育った胸が、理子が飛び跳ねるのに合わせて揺れる。それをちらちらと見ていくのは、言うまでもなく下心ある男子生徒である。

「じゃあ先に帰るよ」

キリは、教室に置いてきたのか、鞆を持っていない理子に背を向けた。

近くを歩いていた生徒は、キリの表情を見て、すっと目を逸らしていく。

キリは本来、そんなあからさまに目を逸らされるようなことなどない。

見ただけなら、あどけなさの残る美人である。

黙って座っていれば綺麗とも可愛いともとれるその顔で、多くの視線を引きつけるほどである。

見ただけ、ならばの話だが。

よって、キリが目を逸らされるのは珍しい光景である。

そんなことなど露ほども気にせず、廊下を歩くキリは、――悪戯を仕掛けた子供

のような、薄気味悪い笑顔だった。

「きりりん、理子と一緒に依頼しよっ」

可愛らしい笑顔で、理子はキリに本題を切り出した。

キリは少し考えた後、依頼は何、と理子に質問する。

「おおっ！引き受けてくれる感じ!?!」

「依頼によってはね」

理子は小学生が持つような赤いランドセルをこそごと漁り、いくつかの資料を出した。

「どんなのがいいか分からなかったから、情報科インフォオルマの子に頼んで色々な資料もらってきちゃった」

そう広くない机の上は、その紙で埋め尽くされた。

キリは資料に目をやる。

理子は自分の目の前にあつた資料を、読んでいる。

「んー『深夜強盗事件』に『連続誘拐事件』：あ、これは強襲科と合同依頼だ」
ぽいっと依頼の紙を後ろに投げる理子。

「適当に持つてきたからたまに変なの混じってるかも。あ、これは？『○○区連続空き巣事件』」

「その事件なら、犯人は偽セールスマン。家の鍵にピッキングの跡があるのかなんとか
言つて、開けやすい鍵に付け替えて犯行に及んだ」

ちらりと資料を一瞥し、キリは何でもなさそうに推理した。

「え？」

理子はしばし理解が追いつかなかった。

やがて言葉の意味を理解すると、笑顔のまま頬を引きつらせた。

キリは、机に広げられた資料の、僅かな情報で真相を看破したのだ。

それも、時間をかけずに一瞬で。

「こ、これは並みの事件じゃだめかも…？もつと資料もらつてくるべきだったかなあ…」
そう言いながら、理子は他の資料を探していく。

「あ、これは？『オフィスビル女性社員身投げ事件』！」

「犯人は上司の男、ビルから被害者と一緒に落ちたウィッグは、被害者と同じような髪
型ーーということこれは被害者のものではなく、男のもの。動機はコレだな。女装

癖を持つ上司を脅したら返り討ち、つてところか」

「うぐう…」

現場の写真と状況を見るだけで、またしても犯人を言い当てる。

これ犯人分かっちゃったけどどうしたらいいんだろう、と理子はふと思ったが、今はそれどころでもなかった。

キリがきちんとこなせる依頼を探さなければならない。

「…ん？」

先ほどまで退屈そうだったキリの視線は、一枚の紙に集中していた。

「何々!?良さそーな依頼あったー?」

キリはにやりと口角を上げ、一枚の紙を指差す。

「これなら一緒に行つてやつてもいい」

『迷子の猫探し』

理子は思わず二度見した。

「え、コレ?」

キリは、もう話は済んだと言うようにラムネ瓶を傾けている。

「で、でもコレはちよつと…」

適当にやろうとしているのでは、と危惧した理子に、キリは人差し指を向けた。

「こんなことも分からないのか！馬鹿だなあ。よく見てみる。それにはおかしいところがあるだろう？」

同じAランクであるはずのキリに侮辱され、理子は紙を食い入るように見つめる。

しばらくの間そうしていたかと思うと、理子はいきなりぱつと顔を上げた。

「報酬が、破格……！」

「やればできるじゃないか！その調子だ」

ただの猫探しにしては、報酬の額がおかしかった。

はじめは理子も、金持ちのペットか、と思つて気にも留めなかったが、どうやら迷子の子猫ちゃんは一家庭のペットらしい。

「くふふっ……こういう裏のありそうな事件、理子好きかも……さっすがきりりん！」
その瞳に歓喜の色を浮かべ、理子はキリを賞賛した。

『特徴：三毛猫 ♀

青い首輪

耳と尻尾の先端が茶色。』

ぐつぐつと眠っている、特徴と同じ猫の写真が添付されている。

理子はその写真と目の前の猫を見比べ、唸った。

「違あーう！もう理子飽きてきちゃったよおー！」

大きな声を上げて両手を空に突き出した理子に、猫は驚いてひと鳴きし、逃げていく。

地面に座る理子の近くに、別の白猫がすり寄ってきた。

河原に集まる野良猫たちは、その多くが気持ちよさそうに寝そべっていた。

「峰！しつかり働く！」

「きりりん何もしてないじゃん！狡いぞ！」

石の上に腰を下ろし、理子に指図するキリ。

理子は怒りを表すように頬を膨らませ、両手で頭の上にツノの形を作った。

「あ、あれじゃないか？」

「え!?!どれどれ!?!」

キリは石から勢いよく飛び降り、日向で眠る一匹の猫を拾い上げた。片手で首元を掴まれた猫は、にやあ、と抗議するように体をくねらせる。

「青い首輪、三毛猫……ちよつと見せてきりりん!!」

騒ぐ理子に目もくれず、キリは首輪に挟まっていた紙を取る。

「峰」

理子が名前を呼ばれてキリの方を見ると、ぽんと猫を頭の上に落とされた。

「うわあ!?!ちよ、きりりん!?!」

「にやあ」

いきなり顔に当たった猫の腹の柔らかい感触に、理子は慌てて頭から猫を下ろす。

両手で抱き上げ、膝の上に猫を下ろす。

「あれ、でも写真より茶色い……?」

そう言つて猫の毛並みを撫でると、理子は目を見開いた。

「!この猫、血が……!」

茶色に見えていたのは、乾燥した血液だった。

猫自身に怪我がないので、猫の血ではない。

理子は、慌てたようにキリに視線を向ける。

その時、キリは猫の首輪に挟まっていた紙を広げていた。

『たすけて

○○びょういん』

血で紙に書かれたその文字は、まるでホラーのようでもある。

しかしその文字に込められた縋るような想いは、作り物なんかではない。

「峰、これは誘拐事件だ」

紙を理子の方に向け、キリは真剣な表情で話す。

理子は膝の上で欠伸をする猫の背を撫でながら、緊張した面持ちでごくりと唾を飲んだ。

エビで鯛を釣る 中

「じゃあ、依頼者は誘拐犯？」

「いや、依頼者は被害者家族だ」

「へ？」

理子は猫を撫でながら声を上げる。

キリは石に座ったまま、足をぶらぶら動かしている。

「おそらく、被害者の中に少しは頭の切れるやつがいるんだろう。そいつが、猫にメツセージを託して逃した。ただ、メツセージの書き方が直接的だから、犯人に見つかればすぐに没収されて終わりってことを考えていないのは減点だね」

「でも、犯人のいない時間帯を見極めて猫を逃したのかも」

理子はキリに反論するように言う。

その膝の上で、猫は気持ちよさそうに「やあと鳴いた。

「人にアルゴリズムなんて無いんだから、思い通りになると思わない方がいい。当たり前だろう？」

理子は唇を尖らせ、不機嫌そうにキリに問う。

「じゃあきりりんならどうするの?」

キリは少し考えるような素振りを見せた。

「馬鹿だなあ、私が捕まる訳が無いだろう?」

「えー、それはずるいよ!」

「現実なんてそんなもんだよ」

ふあ、とキリはあくびをする。

しばらく間を置いて、理子が尋ねた。

「それで、結局何で被害者家族が依頼人なの?」

「犯人が気づいた、というのはまずあり得ないからね。犯人がよつぼどの馬鹿じゃなきゃ武偵になんて頼まない。さらに、こんなに血まみれな猫なんてなおさら、ね。それに、猫がこんなにリラックスした写真を持っているのは、飼い主くらいのもだろう」

今まで浮いていた足を地につけ、キリは立ち上がる。

「おそらく、信じているんだよ」

理子の瞳が驚きに見開かれた。

「猫と共に消えた被害者が、何らかの手段で外部に助けを求めると、何もしいんじやなく、そのくらいのこととはすると、信じているんだ。絶対的な信頼関係があり、頭が切れる家族だ」

「…もしかして、見当ついたりするの？」

キリはにやりと口角を上げるが、その質問には何も答えようとしなかった。

〇〇病院は、すでに廃病院となつてから4、5年経つていた。

土地を所有していた人物が、取り壊しを躊躇したため、現在管理の行き届いていない忘れ去られた建物となつていた。

黒縁メガネをかけたキリは、迷いなくひび割れたコンクリートの建物に入っていく。

理子も、猫を抱いたまま桐に続いた。

当然光源はなく、日当たりの悪いせいか昼でも暗い廊下を歩く。

「本当にここなの？見張りもないみたいだけど…」

人を警戒してか、声は小さい。

「いない時間を見計らったからね」

『人にアルゴリズムなんて無い』んでしょ?」

「そんなものから予測したんじゃない」

だんだんと声が大きくなる。

敵がいけないことはキリが断言しているため、理子もキリの声の大きさに合わせたのだ。

「…それで、被害者はどこにいるの?」

沈黙が降りた。

こういう時に無理やり聞いてもはぐらかされるだけだとわかっている理子は、おとなしくついていく。

それ以上の言及をすることはなかった。

「ねえ、きりりん。この誘拐事件の詳細って、知ってたの?」

「知らなかったの?」

え、と理子は思わず声を漏らしそうになった。

まさか疑問を疑問で返されるとは思わなかった。

「峰が持ってきた依頼の中に、誘拐事件の調査もあつたでしょ?」

あつたつけ。

理子は依頼を適当に持つてきただけであり、全てに目を通してある訳ではなかった。

それもそのはず、理子は結構な数の依頼を持ってきていたのだ。「えつと、教えてくれると嬉しいな……なんて」

キリはめんどくさそうに口を開く。

「事件の始まりは約一ヶ月前……」

一ヶ月前、出張で東京に来ていた40代の男性が突如失踪。

ホテルに一泊した後に街へ出て、部屋に荷物を残したまま、仕事場にも家にも行くことなく消えた。

他の失踪者も同じような状況で、単身の旅行者、イベントの参加者など合計9名。

年齢、居住地、職業の共通点は無く、単独で東京を訪れていたことだけが共通している。

ホテルより後の被害者の動向を警察が追っているが、目撃情報はゼロ。

つまり、忽然と姿を消したことになる。

しかしこの大都会で、目撃されずに人を誘拐できる場所などそう存在しない。

また家族に身代金等の脅迫は無い。

最初の4名は眼鏡やサングラスを掛けていたためそれが理由かと思われたが、後にも掛けていない者も失踪したことから、その線は消えた。

すらすらと話していくキリに、理子はもしや、と怪しむ。

「もう犯人分かっていたりする？」

「どうすれば犯人が分かるかは、分かっている」

にやり、とキリは笑ってみせた。

……っ……

人の声が、わずかに二人の耳に届く。

立ち止まって耳をすませば、言葉ははっきり聞こえないが、それでもまた声があった。

「被害者の、声……？」

確認するように理子が呟くと、キリは頷いて肯定した。

理子は辺りを見て、声の出どころを探る。

そう遠くはなさそうだ。

声をたどって着いた先は、霊安室だった。

扉は鉄製で、掛金で施錠されている。

声はここからしていたようだ。

キリが無言で扉の前から退き、理子は掛金を銃で破壊する。

少々やり方は荒っぽいだが、仕方のないことだ。

扉が開いた瞬間に、理子が抱いていた猫は飛び降りて中に入ってしまった。

部屋は恐ろしく暗いため、何も見えない。

キリは持っていた懐中電灯を付けた。

物がほとんどなく、空虚な室内に、縛られた被害者と見られる人が身を寄せ合っていた。

服は剥ぎ取られたのか、ほとんどの人は簡素な肌着姿である。

猫もそこにいた。

「た、助けが来たの……？」

懐中電灯の光に目を細めながら、女性は二人を恐る恐る伺う。

「ああ、だけど少しだけ待って」

キリはそう答えてから、女性に背を向ける。

先程自分たちが入った入り口を睨むキリを不審に思い、理子も同じ方を見た。

薄暗い廊下には、何も見えない。

いや、少しずつ靴音が聞こえてきた。

コツン、コツンと大きくなっていく。

理子は唾を飲んで薄暗闇を慎重に見つめる。

「……」やがて、現れたのは一人の中年男性だった。

スーツを着て、その手に白い手袋をはめている。

男性は、こちらに気付くと驚愕に目を見開いた。

「これはこれは、武偵高の生徒さんですか」

「やあ、犯人くん。これは現行犯でもいけるかな?」

日常会話のようなトーンとテンポで交わされる会話。

理子は拳銃に手をかけながら、様子を見守る。

「犯人は君、それは明白だよ。そして君の職業は、タクシードライバー。さらに言えば誘拐の犯行現場はタクシーの中だ」

理子は改めてその推理力に驚愕しつつも、犯人から目を逸らさない。

男性は、酷く冷めた無表情でキリの話を聞く。

「この都会で人を目立たず誘拐できるのは誰か。見知らぬ人間でも、被害者が何の警戒も無く個室に二人きりになる場所はどこか。考えればすぐ分かるよね。君はタクシーの中で、被害者に催眠ガスを嗅がせ、気絶したところを誘拐した。もちろん、自分はマスクでガスを防いでね」

犯人と対峙して、キリは薄く笑ったまま話を続ける。

追い詰めるのを、楽しむかのように。

「被害者は全員もれなく君のタクシーに乗った。でも警察が調べても、その記録は出ない。当然だよ、だって調べる日付が違うんだもん。被害者が乗ったのは、失踪した日

じゃない」

理子はその推理を聴きながら、色々と納得していた。

拳銃にかけた手に意識を向けながらも、推理に聞き入っていた。

「君は業務をこなしながら、特定の客を探していた。『一人で東京に来ており、これからホテルに向かうこと』『帽子や眼鏡、サングラスなんかで顔が部分的に隠れていること』『君と背格好が似ていること』。君は小柄だから、女性でも良かった」

「その条件に合う人が見つかったら、催眠ガスで気絶させ、ここに監禁。荷物と服を奪った。…だから、ここにいる人はこんな姿だったんだね」

理子も探偵科の優秀な武偵だ。

ここまで情報が明かされていれば、この先のことなど手に取るように分かる。

キリは理子が口を挟んだことを意にも介さず、続きを話し始める。

「君は被害者の服を着て、被害者に変装した。素人でも、化粧なりなんなりである程度誤魔化せる。その上、君が騙すのは人では無く監視カメラの映像で良かった。被害者が宿泊予定のホテルに行って、わざと映像に映る」

顔を一部隠す眼鏡や帽子は、変装が簡単だっただろう。

だからこそ、特定の服装の人物を選んだ。

「あとは簡単、ホテルに荷物を置いて翌日に立ち去る。そうするとホテルから出て行く

姿が、また監視カメラに映るからね。だから警察は、その後の動向を追う。もちろん何の跡も見つかると記録がないよね。君はその辺りの地理を十分に把握していただろうし、どこに行くと記録が残って、どこを逃げると監視カメラに映るのかは事前に知ってる。そうして消えた被害者の出来上がり、っていうわけだ」

しばらくの沈黙が下りる。

やがてキリは大きく息を吸い、

「しかしー」

と、楽しそうに言った。

「君の完璧な犯行は、たった一人の女子中学生に見破られてしまった」

キリは、被害者の中でただ一人、制服を着た少女を指差す。

その少女こそ、あの猫の飼い主だった。

猫はすでに少女に寄り添っている。

「彼女は独自の調査で事件の真相に気付き、そして、無謀にも解決を図った。君を、自首するように説得しに行った。馬鹿だなあ、子供に言われてやめるくらいなら、最初からやってないだろうに」

そのことと言い、猫を使った救難信号と言い、キリに言わせれば彼女はとことん詰めが甘かった。

「まずいと思った君は、予定外に彼女を攫うことになってしまった。そして無力な少女はあえなく攫われてしまった」

それが、名探偵をこの場に招くきっかけとなった。

ただの誘拐事件なら、キリがこんなにも興味を持つことは無かつただろう。

「はははははー！」

男性は突如として笑い出した。

そしてひとしきり笑ってから、笑顔を崩すことなく威圧的に話す。

「そうです、すべてその通りですよ……ですが、証拠はありません。もしかしたら、タクシーの後部席から催眠ガスの成分が検出されるかもしれませんが、客が蒔いたと言って誤魔化すこともできます。……つまり！逮捕することは不可能なんです」

理子はそうなることもある程度予想できていた。

この男性の様子から、証拠はほとんど残されていないだろう。

そして男性の言う通り、誤魔化すことだってできる。

「それはどうか？！」

しかし、キリはそう言ってポケットからあるものを取り出した。

「さっきまでの会話、ずっと録音してたよ」

小型の録音機だ。

これには男性も絶句する。

にい、と笑ってキリはそれをポケットに仕舞う。

「峰、確保」

その言葉に、理子はすぐに動き出した。

男性は逃亡を図るが、現役武偵とただのタクシードライバーでは身体能力が違う。

すぐに追いつかれ、手錠をはめられた。

「っ、くそー！」

まだ暴れようとする男を、理子は気絶させる。

その間に、キリは被害者の元に歩み寄っていた。

「あ、あの……あなたの、名前は……？」

制服姿の少女は、前髪でほとんど隠れている目でキリを見上げて、恐る恐る尋ねる。

「江戸川 キリ。君は？」

「わ、わたしは……エリノア・アラン・ポオである。その、ありがとう」

エリノアは、うつむき気味に頬を染めて礼を言った。

「推理力、行動力、判断力は結構良かったよ。ま、私には劣るけどね！それに、詰めが甘

い」

キリは楽しそうに指摘した。

エリノアも、言われていることは褒め言葉では無いのだが、少し嬉しそうだ。

「…だから、もつと力を付けたければ、武偵になるといい」

キリは、エリノアの前でかがんで目を合わせた。

「結局、また理子は犯人の確保だけかー…」

警察に犯人を引き渡し、依頼を終えた帰り道。

理子はそう言っつて口を尖らせた。

「適材適所つてやつだよ」

キリはどうでも良さそうに口の中で飴を転がす。

「うー…他の日にまた、別の依頼とか受けに行かない？」

「明日から三日は連続で依頼が入ってるし、まだわからないから…まあ、予定が合えば行ってやってもいいけど」

「やったー！じゃあ理子、また依頼探すー！」

理子は飛び上がって喜びながら、冷静に考え事をしていた。

（チャンスは明日、明後日、明々後日の三日間…明日は準備に当てて、明後日に決行かな…）

エビで鯛を釣る 下

「夾竹桃、ジャンヌ、ここだよ」

あたしは、二人の方を向いて、武偵高女子寮のひとつの扉を指差した。

二人はイ・ウーの同期で、あたし達は結構仲が良い。

でも今回は遊びに来たんじゃなくて…

「ここが、江戸川 キリの住まい、か」

ジャンヌは険しい表情でドアを睨んだ。

きりりんの部屋には、あたしも入ったことがない。

キーくんは入ったことあるって聞いたけど、他には誰も入れてないみたい。

きりりんは、途轍もなく賢い。

だから本当はイ・ウーのことをどこまで知っているのか、把握しておく必要がある。

「理子、鍵はあるの？」

夾竹桃があたしに聞く。

あたしは、前に作っておいた合鍵をポケットから取り出した。

「くふっ、きりりん鍵の管理はぞんざいなんだもん。簡単だったよ」

さつそくその鍵で、きりりんの部屋を開ける。

部屋の中は、殺風景だった。

隅に置かれたゴミ袋にはお菓子のゴミがいっぱい入っていて、そこだけに生活感が現れていた。

「物が少ないのね」

爽竹桃は部屋を見渡してそう言った。

確かに全然物がなくて、本当にここに住んでいるのか、と疑いたくなるくらいだった。もしかしたら、この部屋には何もなければかもしれない。

それでもあたしたちは、可能性がある限り手がかりだけでも探す必要がある。

江戸川 キリという、イ・ウー始まって以来の最大の脅威を、取り除くために。

「…異様に瓶が多いな」

ジャンヌは、不思議そうにキッチンを見る。

十数本のラムネ瓶が、転がっている。

でも、中にあるはずのビー玉は全部無くなっていった。

どこかに置いているのかな、と少し探せば、棚にある透明のケースの中に、ビー玉が詰まっていた。

よくラムネを飲んでいるのは見ていたけど、まさかビー玉を集めてるなんてなあ。

一応携帯のカメラで写真を撮る。
後に教授に見せるためだ。

あたしたちだけじゃ見逃すこともあるかもしれないし、それに教授ならどんな些細なことから見抜いちやうこともあるだろうから。

…それは、キリも同じなんだよね。

どんな小さなことからでも、推理しちやうんだから。

「うーん、この部屋は何もないのかな」

あたしは一通り写真を撮ってから、他の部屋に続くドアを見た。

閉まってはいるけど、鍵まではかかっていない。

そつとドアノブに手をかけて、扉を開く。

「…っ！」

その部屋の壁には、新聞やネットの記事、誰かがまとめたらしい資料が乱雑に画鋲で止められていた。

しかも、よく見るとあたしたちイ・ウーに関連するような事件ばかり。

武偵殺しや魔剣^{デュランダル}、その他イ・ウーの知り合いの記事がたくさんあった。

少しだけ、違和感を覚える。

ジャンヌが顔をしかめるのが見えた。

あたしも、多分同じような顔をしているのだろう。

「全部、お見通しってわけ？」

夾竹桃が嫌悪感たつぷりにそう言う。

「でもこれ、キリが集めたんじゃない」

あたしは冷えた頭で考える。

だってキリは、探偵科には向いてないんじゃないかって程調査が苦手なはずなんだ。

「なら誰が…」

ジャンヌは顎に手を当てて唸る。

「フクザワ…」

あたしは気付けばそう呟いていた。

「誰なの、それ？」

「わからないけど、キリの知り合いみたい」

キリは度々その名前を漏らしていた。

調べる価値はありそうだね。

いくら賢くても、キリは普通の人間。

ジャンヌや夾竹桃みたいに特殊な能力を持つてるわけじゃない。

だから、何の情報も無しに推理することはできない。

必要な情報を、どこから掴んでくるのかと思つてたけど……

「フクザワ」

その人が、助手のような役割を果たしていたのかも。

『やあ！気は済んだかな？』

その声は、聞き覚えのある、今日は依頼に出ているはずの人の声だった。

身体が硬直する。

夾竹桃やジャンヌも動く気配は無いから、おそらく二人もあたしと同じように固まっているのだろう。

真っ先に口を開いたのは、意外にも夾竹桃だった。

「江戸川 キリ……？」

『御察しの通り、名探偵だよ！』

静かな室内に、家主の明るい声が響く。

焦りと混乱でぐちゃぐちゃになった脳内で、ああやっぱり、と少しだけ思った。

「嵌めたのか……！」

ジャンヌは険しい顔つきで、一点を睨む。

それは、一冊の本。

ファイルが乱雑に突き刺さる本棚で、一冊だけ置かれたタイトルの無い本。

あたしはそれをそつと手にとつて、開く。

想像通りそれは本ではなく、箱だった。

そこには小型の機械が仕込まれている。

『嵌めたなんて、人聞きが悪いなあ』

どうやらその機械から声が聞こえているらしい。

音が一段と大きく聞きやすくなった。

それとほぼ同時に、ジャンヌが舌打ちをする。

「実際そうだろう」

ジャンヌがちらりとこちらを見る。

「喋るな」ということだろう。

予想外の事態に戸惑っているが、自分もジャンヌも案外冷静らしい。

あたしがココにいる、ということは、キリには知るすべなど無いはずだ。

見た所どの部屋にも監視カメラの類は無かった。

それに、武偵殺しがあたしだってことも、気づいているとは限らない。

武偵殺しや魔剣などを調べてはいたようだけど、その正体に関するような資料は無

い。

だから、あたしはバレないように静かにしなきゃいけない。

『どうして私がイ・ウーの君たちを嵌めなきゃいけない？』

どういうことだ。

しん、と静寂が下りる。

嵌めたんじゃない、ということを手元で言いたかっただけなのかもしれない。

でも、きつとそれだけじゃない。

嵌めるまでも無いってこと……？

手元の小型の機械に、視線を下ろす。

あたしは、ふと先日のことを思い出した。

そして、気づいた。

この機械を設置しておいたということは、キリは前々から侵入者が来ることを知っていたことになる。

いつも置いているのかと思ったが、それにしてもタイミングが良すぎる。

これは録音なんてできない、リアルタイムで音声を届けるタイプのものだ。

依頼に行くと言っていたキリが、音声を確認した時とあたしたちがこの部屋に入った時が、たまたま重なったとは考えにくい。

なら、どうして侵入者が『今日』『この時間に』来るのが分かったのか？

『明日から三日は連続で依頼が入ってるし、まだわからないから……まあ、予定が合え

ば行ってやってもいいけど”

あたしが別の依頼の日を尋ねた時の、キリの台詞だ。

侵入の日付を今日に決めさせた言葉。

どうやってその三日のなかから、今日この時間を割り出したのかは、わからない。

あの名探偵のことだから、他の細かい判断材料を掻き集めて辿り着いたことなんだろう。

…その時に分かったとしか、考えられないのだ。

そしてそれなら、キリの言葉の意味もわかる。

嵌めるまでもない、当たり前だ。

だってあたしは、自分からこの日に行きますと言ったようなものなんだから。

でもそれは、ある一つの仮説の上に成り立っている。

…あたしがイ・ウーに属する犯罪者だと、キリは知っている。

でも、いつから？

少なくとも、おとといにはもう知っていた。

『何か言いたいことがあるんじゃないかい、峰・理子・リュパン4世？』

4世、という単語に、一気に頭に血がのぼる。

噴き出しそうになる感情を、あたしは必死に押さえつけた。

キリはそういうつもりで4世と言ったんじゃない。

今問題なのは、キリがそこまで知っているとということだ。

でもまずは、別の質問から。

「依頼は、どうしたんだ」

キリが今日は依頼に行くのだということは、ちゃんと調べて裏付けた。

でもキリは今、こうして話す余裕がある。

『あれねえ。死体を一目見たら犯人と手口が分かったから、さっさと解決してきちやつた』

キリのこういうところは、本当に流石としか言いようがない。

「……いつから、あたしの正体に気付いた。どこまで知ってる」

『矢張りそれが本題か。……君が単なるただの武偵じゃないってことは、最初から気付いていたよ。本格的に調査、推理をしたのは、シャーロック・ホームズと話してから。峰がそこに所属しているというののは、その時に分かったからね』

教授は一切あたしたちのことは話していないと言っていた。

なのにどうして分かったのか、なんて聞いても意味は無いだろう。

大事なのは過程ではなく結果だ。

『どこまで、か。君が4世という呼び名を好いていないこと、その理由……それか

ら、ある吸血鬼から解放されるために、初代を越えようとしていることとか？』
そんなことまで。

思わず機械を壊してしまいたくなかった。

『ああ、ついでに言うとか峰以外の二人……魔剣 ジャンヌ・ダルクに夾竹桃、君たちのことも粗方調べはついてるよ』

予想はついていたことだ。

それでも空気が凍るのは、情報を掴まれているということがどれだけ脅威であるのかを、あたしたちは知っているから。

「…何がしたいの」

夾竹桃は苦々しい顔で吐き捨てるように言った。

『いずれ侵入されるなら、させればいいと思っただけだよ。…ああ、それと私の部屋が漁っても無駄だと思うよ』

そうだ。

部屋に入った時の違和感の正体が、今になって分かった。

どうやって一人暮らしなんてしてるのか疑問に思うほど、キリは自由奔放で生活力がない。

こんなに、綺麗に事件の資料をまとめているわけがないんだ。

これだけ資料が揃っていて、キリが推理できていないわけがない。解決済みの資料を、放っておくなんてキリらしくない。

この部屋を作ったのは、キリじゃない。

『無駄足ご苦勞ごじゃあ、ちゃんと鍵かけて帰ってね！』

その屈辱に、あたしたちはどうすることもできなかった。

「…以上が、江戸川 キリの部屋であつたこと」

あたしが報告すると、教授は顎に手を当てた。

『フクザワ、か。ある程度推理はできるが、一応調べておいてくれ、理子君』

その頼みに頷きながら、ふと今更疑問が湧く。

「そういうえば、どうして正体を知りながら誰にも言わないんだろう」

「…断定は難しいが、彼女に何らかの企みがあるのかもしれない」

教授にしては自信が無さそうな感じだ。

それほど、キリは有り体に言えば すごい のだ。

「二人の人間が、観察と推断を基礎として、一瞬で論理的結論を導き出す……単に推理と言えよそれまでだが、手持ちの情報を結合させ、結論を一瞬で導き出すのはそう簡単ではない。だが、彼女にはそれができる」

「教授にも、できるんじゃないの？」

あたしの問いに、教授は楽しそうに笑いながら否定する。

「推理小説の名探偵でも、活躍するのは事件の最後、本の終わりだ。なら現場にも行かず容疑者にも会わず、ただ資料を一瞥しただけで事件を解決する江戸川 キリは、凡庸な名探偵程度では手の届かない、恐るべき推理力と観察力を持つているということになる。……僕に、そこまでの力は無い」

教授の明らかな敗北宣言に、あたしは驚くしかなかった。

「能力ならばただの現象だ。しかし、彼女は誰もが持つ思考力を働かせた結果、事件を解決に導く。実に素晴らしいよ。間違いない、彼女が世界一の名探偵だ。…だが、彼女は子供。僕はもう長く時を重ねてきた。簡単に負ける気はない」

そうして教授は、大好きなゲームを目の前にした子供のように、笑った。

閑話 昼に夢見る人

A person dreaming in the daytime
knows a lot of things that cannot be
seen by those who only dream of night.

—— ああ、確かにその通りかもしれない。

わたしの名前はエリノア・アラン・ポオ。

米国で探偵紛いのことをしていた。

現在暗いところで捕まってしまうている、女子中学生である。

正直すごく後悔している。

来日した際に見かけたタクシーに違和感を覚えたのが、はじまりだった。

興味をそそられて調査してみたところ、なんと旅行客を狙った誘拐犯であったのだ。

来日したばかりで勝手がわからず、そのまま警察に伝えもせず犯人のところへ乗り

込んだのが失敗だった。

日本での警察の呼び方くらいは調べておくべきだった…。

普段引きこもっているわたしに抵抗する手段などなく、こうもあつさり攫われてしまった訳である。

愛猫である三毛猫のプルトごと。

そのおかげで何とか頑張って誰かに気付いてもらう算段をつけられたわけだが。

しかし、まさかわたしがこんな失敗をするとは…

米国では引きこもっていたせい^{むしろう}か、事件に巻き込まれることも無かったのだが。

ああ、はやく誰か助けに来ないだろうか。

わたしの両親は探偵では無いが、頭はキレる。

だからそう時間も経たずに救助が来ると思っていたのであるが…

“自分のことは自分で責任を取れ”

よく母が言っていた。

つまりわたしが誘拐されようが、それはわたしの責任なので直接助けには行かないぞ、という我が両親の意向である。

世知辛い。

やはりわたしの理解者は、プルトだけなのである…！

今は、そばにはいないが。

はやく誰か救助にこないだろうか。

ああ、はやく

「助けて……っ！」

何かを壊すような音が、大きく空気を震わせた。

今まで無音だった世界に響いた破壊音は、鼓膜を破りそうな勢いで震わせる。

その音から間も無く、暗かった室内に一筋の光が差し込んだ。

愛猫プルートが、その光の出所からこちらに走ってくる。

プルートはわたしにすり寄って、にやあ、と鳴いた。

ああ、良かったプルート、無事だったのであるな……

ぱつと懐中電灯か何かで照らし出される。

「た、助けが来たの……？」

近くにいた女性が、眩しそうに目を細めながらたずねる。

すると光の方から、わたしとそう変わらないような年頃の少女の声が答えた。

「ああ、けど少しだけ待って」

目が慣れてきて、ようやく少女の姿が見えた。

チヨコレート色の帽子からはみ出た乱雑に切られた黒髪と、コート裾がわずかに揺れている。

彼女はわたしたちに背を向けていた。

まるで、何かから守るかのよう。

やがて、コツン、コツンと、小さく足音が聞こえた。

それは途中で止まり、代わりに男性の声が聞こえる。

こちらからはあまり聞こえなかった。

男性の姿も、よく見えない。

でもわたしたちを攫ったあの運転手であろうことは、容易に想像できた。

「やあ、犯人くん」

これは現行犯でもいけるかな、なんて軽口を叩く少女。

それから、少女の推理ショーが始まった。

大筋は、わたしの推理と同じだった。

大した相違点はない。

ということは合っていたのであるか、なんて考えていたら、いつの間にやら少女に指

さされていた。

次々に披露されていく、わたしに関しての推理。

そして気づいた。

彼女とわたしの決定的な違いに。

わたしの推理は、ここまで細かく状況を当てることはできなかつた。

どうして彼女は、わたしのことすらも、こうも簡単に推理していくのだろう。

ああ、すごいなあ。

馬鹿だなあ、と言われたのには多少腹が立ったが、こうして捕まっている以上ぐうの音も出ない。

それから流れるように犯人は追い詰められ、あつという間に取り押さえられたようだった。

素晴らしい手際だ。

少女が、くるりと振り返る。

黒縁眼鏡の奥にある涼やかな瞳の奥からは、理知的な光が見て取れた。

微笑みを浮かべる口元からは、どこか妖艶な雰囲気漂っている。

わたしは、思わず声をかけた。

「あ、あの……あなたの、名前は……？」

どうしても、知りたかった。

わたしが初めて、自分よりもすごいと思った頭脳の持ち主を。

「江戸川 キリ。君は？」

江戸川、キリ。

名前を何度も心の中で反芻する。

「わ、わたしは……エリノア・アラン・ポオである。その、ありがとう」

「推理力、行動力、判断力は結構良かったよ。ま、私には劣るけどね！それに、詰めが甘い」

キリは楽しそうに指摘した。

それがどんな指摘であろうと、わたしは天にも昇る心地だった。

彼女が褒めてくれた。

「……だから、もっと力を付けたければ、武偵になるといい」

キリは、わたしの前でかがんで目を合わせた。

武偵。

そこにいけば、彼女のようになれるだろうか。

それからキリはすぐに去つて、わたしたちは解放された。

A person dreaming in the daytime know
s a lot of things that can not be seen
by those who only dream of night.

昼に夢を見る人は、夜にしか夢を見ない人には見えないたくさんのことを知っている、か。

きっとあの人は、真昼の夢を見ているのだ。

だから、こんなに多くを知っているのだ。

学びたい、と思う。

あの人のところで。

だから、——

「わたし…いや、我輩は、武偵になりたい！」

我輩は、はじめて母に頭を下げた。

蒼穹の前奏曲

「さあ、ゲームでもして暇を潰そうじゃないか…江戸川 キリ君」

教授と呼ばれるその男は、期待を込めて笑みをこぼした。

これは、一対一の勝負。

楽しい楽しい、推理ゲームだ。

学校の廊下を、ラムネ瓶片手に歩く。

もう片方の手には、教務科マスターズからの呼び出しの紙。

教務科に呼ばれるのは、これが初めてではない。

今まで何度か、警察や他の武偵の手に負えない事件のお鉢が回ってきたことがある。仕方ないよね、この世の難事件は、すべからく名探偵の仕切りに決まっているのだから。

「失礼します」

最低限の礼儀としてそう声をかけ、私は目の前の扉を開いた。

「おう、来たか！」

「こつちよ江戸川さん」

蘭先生、それから高天原先生は、私を認識した途端に大きな声をかけた。

二人の先生の前には、既に先客がいる。

遠山 キンジ、強襲科Sランク

峰 理子、探偵科Aランク

不知火 亮、強襲科Aランク

武藤 剛気、車輛科Aランク

レキ、狙撃科Sランク

皆各学科の優秀な生徒だ。

「よし、全員揃ったな」

蘭先生は、名前の通り豹のように鋭い目をして笑った。

「お前らでチーム組んで、事件解決してこい」

「はい、これ資料」

高天原先生は、優しい笑顔で皆に紙束を配る。

拒否権はないらしい。

教務科からの依頼を単独で受けることはあつたが、チームで受けるのは初めてだ。

「用はそれだけや。解散ッ！」

蘭先生はそれだけ言って私たちを追い出した。

「連続爆破テロ事件、か…」

資料を見ながら呟いたのは、キンジ。

確かこの事件は、テレビニュースにも大々的に取り上げられていた。

「にしても、先生たちもうまくチームを組んだもんだな」

専門的なことも記されてある資料に飽きた武藤が、皆の顔をぐるりと見回す。

「そうだね。お互い足りないところを補強しあえるような組み合わせだ」

不知火は資料から目を外さずに答えた。

彼の言う通りだ。

峰と私で情報面は補える。

さらに戦闘になっても、私以外の全員がある程度戦える。

バランスが重視された良い組み合わせだ。

「この、爆弾…」

びたりと紙をめくる手を止め、不知火が呟いた。

「どしたの、ぬいぬい？」

峰はその様子を不思議に思っ、不知火の方を伺った。

爆弾…爆弾と言ったか。

私は資料の少し先を見て、不知火が手を止めた訳を理解した。

「厄介な爆弾が使われているね」

これは警察による調査の結果だ。

このテロに使われている爆弾は、スラリ―爆弾にアルミニウム粉末を組み合わせた車

両爆弾。

乗用車に数百キロの爆薬を積み、特定の信号で信管を遠隔爆破させる。

さらに安価で大量生産可能な代物。

爆心地から半径200メートル程度の人間は爆風で即死。

離れた距離にいたとしても、爆風の高熱と融解アルミの雨が降り注ぐ。

アルミニウムは燃焼促進剤であり、強い白光を放ちながら燃えて爆炎の威力を増す。

と同時に、爆風に乗って飛散し、摂氏600度の高熱飛沫となって人の肉体を貫通し焼き尽くす。

とどめに、金属アルミニウムは水と反応して可燃性の水素ガスを発生させる。

つまり、水をかけると燃えるのだ。

消化のための放水で、さらに爆発が連鎖し、救助が困難になる。

「……この爆弾を使う犯罪者、もしくはこれを作れるような犯罪者がいないか、峰は後で調査してくれ」

私は早速峰に指示を出す。

「りょーかい！」

峰は可愛らしいペンで紙にメモを取る。

「人口密集地で爆発が起これば、後の停電や事故なんかの二次災害も含めると、千人を超える死傷者が出るんじゃないかな」

不知火は難しい顔で資料を睨む。

今までの爆発は人のいないところで起こっていた。

だからまだ、目立った被害はない。

「乗用車で運べるから、監視もむずかしい。…とりあず、今できるのは調査くらいだな」

キンジも、根暗そうな顔を一層暗くして悩んでいる。

「まあ、こつちには江戸川もいるんだし、犯人はすぐに分かるんじゃないか？」

武藤は呑気に私を見た。

もちろんだ。だって私は、世界最高の名探偵なのだから。

「でも、どうして犯罪者に絞るんだ？」

私はキンジからの質問に、馬鹿だなあ、と返してから答える。

「爆破予告状があったらどう？資料に載ってる」

「ああ…」

予告状には、爆発が起こった場合の被害の様子まで記してあった。

『太陽が落下したかのような白光と消えぬ炎。居並ぶ建物は根こそぎ崩れ、人々は焼け

ながら逃げ惑い、路面は融解し、吹き飛んだ車両が建物に刺さって燃え盛り、——』

「…妙にリアルな爆発の描写だ。おそらく、この文章を書いた犯人は、実際にこの光景を

見ている。…しかし、これだけの大爆発を撮影なんてしてる余裕は無いはずだ。それに

これは爆発からほんの数分後の様子みたいだし。…この人は、爆弾を設置して逃げた

後、現場に戻ってきてこの光景を見た」

根拠はそれだけではないのだが、キンジたちを納得させるにはこれだけで充分だろう。

現になるほど、と頷いている。

「でも、こんな爆弾作れるような人って少なくはないよね?…:だとしたら、あんまり絞り込めないよー…」

と、言いながら私を見てきた峰に、確かに、と武藤も同意を示した。

「絞り込まなくていい。調べてリストアップしてくれば、それで充分だ」

私にはやり、と笑う。

私には、それだけあれば充分だ。

犯人が、私並みの天才か、相当狡猾な者でさえ無ければ。

「頼もしいね、江戸川さん」

不知火が人の良さそうな笑みを私に向けた。

今日のところはこれでお開きとなった。

しかし、峰は最後まで私から離れることなくそばにいる。

「…キリ。どうしてあたしの…イ・ウーのこと、誰にも言わないの」

その瞳に、いつものおちゃらけた感じは存在しなかった。

「馬鹿か君は？いや、疑問形は失礼だな…馬鹿だ君は！」

敵意の籠った眼差しが向けられる。

私はその視線を笑い、峰の問いかけに対する答えを述べる。

「どうでもいいからだ」

驚きに見開かれる目。

しかし、私の言った意味と峰がとった意味はきつと少し違う。

彼女はきつと、犯罪者がのさばることに関心がないのだと、そう思ったことだろう。

勘違いに気づかずに。

それでも指摘してやる気はない。

私は峰に背を向けて、そのまま歩き出した。

黄昏の独唱曲

俺と武藤、不知火、それから理子とキリ。

そんな妙なチームであたることになった事件は、誰もがすぐに解決できると信じて疑わなかった。

なぜなら、江戸川 キリがいるから。

キリがいれば、どんな事件でもすぐに解決する。

キリの絶対的な推理能力があれば。

それはある意味崇拜にも似ていたのかもしれない。

キリだって間違えることはある、人間なんだという当たり前のことを、俺たちはいつものまに失念していたのだろう。

『大切なのは、キリの才に圧倒されず、常に彼女を、一人の少女として、客観的に見てやれることだ』

福沢と名乗った男に言われた言葉を、俺はすっかり忘れていた。

「きりりん、資料出来たよー！」

チームでの集合場所に一人遅れてきた理子は、紙束をぶんぶん振り回しながらキリに飛びついた。

キリは一步横にずれるだけで、みごとにそれを回避。

理子はその勢いで綺麗に前転し——

「ぶぐあつ!? 手首、手首がああああ!!」

みごとに負傷していた。

座り込んで手首を抑えて叫んでいる。

何やってんだ、この理子あほは。

「い」苦勞」

そんな理子を歯牙にもかけず、資料だけを奪うキリ。

理子のことが見えていないかのように資料のページをめくりだす。

流石に少し理子に同情してしまった。

あそこまで完璧なスルーは虚しい。

「キーくんの視線が悲しい！」

どうやら同情がバレたらしい。

ひどいよー、と言いながら理子は顔を覆って泣き真似を始めた。

あ、よく見るとこいつ、ちらちらこつちの様子を伺ってやがる。

そろそろめんどくさい。

「ほら、いつまで床に座ってるんだ。汚いぞ」

相手にされていないことを理解したのか、理子は泣き真似をやめた。

そして俺をちらつと見て…

「そこは手を差し伸べてくれるところじゃないの？」

理子が白い頬を膨らませながら不満をこぼす。

負傷したのは手首であり、立つことに問題は無いんだから自分で立て。

俺に何を求めているんだ。

なんて思いながらも、じつと見てくる理子に根負けして俺は手を差し伸べた。

「ほら」

「わーいー」

その手にはちよつと触れる程度で、理子はほぼ自力で立ち上がる。

おい、絶対意味無かっただろ。

「なあ、峰」

ようやく立ち上がって制服のゴミを払っていた理子に、キリが声をかけた。

キリの方を見ると、もう結構資料を読み進めていた。

声をかけている間もなお、紙をめくる手は止まらない。

「君はこの事件、どう思う？」

おそらくその瞬間、皆が思ったことは完全とはいかずともほぼ一致していただろう。

まさか、キリが意見を求めるなんて。

あいつのことだから、何でも知っていそうな印象があった。

——しかも、その内容は普段のキリとは結びつかないものだ。

事件なんて、大抵一人で簡単に解決してしまうキリが、人に意見を求めるとは。

「……え？」

案の定峰も驚いていた。

しかしその驚き様は俺以上で、完璧にフリーズしてしまっている。

こいつでもこうなることはあるのか。

キリはページをめくる手を止め、煩わしそうに理子の方を見遣る。

「君も探偵科なんだから、ある程度推理くらいできるでしょ？」

しかし同じ探偵科とはいえ、理子が得意なのはどちらかというと調査の方だ。

推理だつてできるが、それはキリのような天才には遠く及ばない。

いや、そもそもキリよりも推理ができるやつなんているのか？

「…あ、えーつと、うーん…愉快犯、かな？ 今までの爆発は全部死者が出てるけど、それに関連性はない。つまりは無差別。…だから私怨の線は薄いかな」

「間違つてもいいが合つてもいいないな」

と、キリは微妙な判定を下した。

しかしそれ以上何も言おうとはしない。

「犯人は——」

俺と不知火、理子、武藤はキリが資料から特定した犯人のところへ来ていた。

レキは既に少し離れたビルの屋上で狙撃準備をしている。

キリは何処にいいのか知らないが、インカムで指示や推理を行う手筈になっている。

『突入、開始』

インカムから聞こえたキリの声に従い、武装した俺たちは廃工場へと入った。

中は薄暗く、静かだった。

しかし得体の知れない空気が漂っている。

俺は強襲科のSランクとはいえ、今はその力を使えない。

ヒステリアモードを使う気はない。

まあせいぜい不知火の足を引っ張らないようにするしかない。

「本当にこんななんだよな……？」

『ああ』

慎重に足音を殺して進む。

ここにはいない……別の部屋か。

目の前の大きな鉄製の引き戸に手をかける。

鍵はない。

少し錆びついているため、どう開けても音が出るのは防げないだろう。

ギギイ、と音を立てて一人通れるくらいまで扉を開けると、

「来たぞおおお!!!」

その中から、男のそういう叫び声が聞こえた。

仕方ない、と一気に開けて拳銃を向ける。

——中にいたのは、せいぜい小学校高学年か、それより下の子供ばかりだった。

しかもそれが、手榴弾やら拳銃やら物騒なものを持っている。

その子供たちが立ちはだかる奥では、資料で見た「犯人」の男が更に奥へと逃げようとしている。

「子供を盾に…!!」

理子が忌々しげに吐き捨てた。

そう言いたくなるのもわかる。

武藤や不知火も、苦い顔つきで武装した子供達を見ていた。

「おにいちちゃんを、こ、殺さないで…!」

10にも満たない少女が、手榴弾を両手に持って恐怖に染まった表情で請う。

「おにい、ちゃんを…」

そして右手に持った手榴弾のピンを引き抜き、こちらに放り投げた。

すかさず理子が前に出て手榴弾を蹴り上げる。

幸い天井はポロポロで穴だらけだったため、うまく外で爆発してくれた。

それを皮切りに、皆思い思いに攻撃を始めた。

「おいキンジ！お前はあの男を追え!!」

武藤はそう言いながらナイフを持って襲って来た子供の相手をしている。

不知火はうまく銃だけを狙って撃ち、武装解除を試みる。

理子は手榴弾を持った子供を優しく無力化していき、レキは武器を使えないように銃弾で破壊していた。

「わかった」

俺はその合間をくぐり抜けるように奥へと向かう。

子供を使うなんて、全く趣味が悪い男だ…!!

『キンジ、聞こえてる?』

「キリか!?ああ、今俺が犯人を追って…」

『知ってるよ。そろそろ見失う頃かと思ってるね』

どういふことだ、と言おうとして周りが閉鎖空間であることに気づく。

出入り口は俺が入ってきたところのみ。

窓は全て内からロックがかかっている。

「…その通りだよ」

『下だ、キンジ。地面にマンホールのようなものがあるはずだ。その中へ入れ』

指示通りに地面を見渡すと、確かにマンホールのような丸い金属があった。

見た目よりも軽かったそれを持ち上げると、わずかな明かりに照らされた通路が見えた。

「あつた。今から入る」

梯子を伝つて中に降りると、それは隠し通路に違いなかった。

点々とロウソクの灯が揺れている。

奥の方からは、急いで走っているような足音まで聞こえた。

反響で距離までは分かりにくい、目指すべき方向は分かる。

足音を殺しつつ、急いで逃げられないように走る。

段々と足音は大きくなり、やがて犯人らしき男の背中を視認できた。

「動くな!!」

拳銃を構えてそう言うと、男は両手を挙げてゆっくりと振り返る。

「くそ、くそつ……!!どうして、俺が……!」

警戒しながら2、3メートルの距離まで迫る。

「俺はちよつと強盗事件を起こしちゃまっただけなのに……!」

……今、この男は何と言った?

『キンジ、インカムの音をスピーカーにしてくれ』

キリは静かに指示を出す。

俺はそれに従ってインカムのボタンを操作した。

『やあ、犯人くん。1つ聞くけど、どうしてこちらの襲撃を予想できたんだい?』

その言葉で俺は納得した。

そうだ、異常なほどに用意周到だった。

子供は何十人もいて、ひとりひとりが武装していた。

そんな数の武器を、いつ用意した?

急な襲撃で用意できるようなものじゃなかった。

何故?

——その答えが、予想していたから、だ。

「いい、言えば殺さないか?」

『約束しよう』

武偵は人を殺せない。

約束も何もないのだが。

「ある、親切な男が教えてくれた。…あ、そうだ!そいつが、これを見せれば助かると

……!」

男は慌てたように懐を探り、一枚の紙を出した。

銃は向けたまま、それを受け取って開く。

「キリ、情報だ。新たな容疑者が…」

『…本物、にしか思えない。でもおそらく、その容疑者に強襲を仕掛けても今回と同じ結果になるね』

とりあえず強盗事件を起こしたという男に手錠をかけ、廃工場の方に一度戻ろう。

その途端だった。

俺の携帯が鳴る。

しかも、この着メロ、蘭豹か!?

「は、はい！もしもし遠山です！」

慌てて出て、携帯が耳についたインカムにカチンと当たった。

しかしそれを気にする余裕はない。

『おう、遠山あ。さっきまた爆破予告が届いた。しかもこの東京武偵高宛に手紙で届いたそうや！後で教務科に取りに来い!!』

それだけで通話は切れた。

『爆破予告…か。先に私が受け取ってくる』

キリの推理が、外れた…？

爆破テロの犯人は別にいる？

キリの推理が、届かないってことなのか…？
そんな相手を、俺たちは捕まえられるのか？

『まったく、手の込んだことだ。そんなに暇なのか？』
キリは、少し苛立たしげにそう言った。